

特別講演

日露戦争に関するロシアの研究史 - 重要な時期・考え方・傾向 -

ドミトリー・パヴロフ

1904～1905年の日露戦争はロシア語によるものも含め、膨大な歴史記述*を生んだ。「大砲が沈黙するより前に、ペンで原稿が書き始められた」とM・I・ドラゴミロフ陸軍大將が指摘しているように、歴史記述はまだ戦争が進展しつつある時期から生み出され始めた。ロシア国立図書館軍事部の計算によれば、1930年代末まで、すなわち、この極東の紛争が終わってからわずか35年の間に出版された英語、ドイツ語、フランス語及びロシア語の歴史文献は単行本だけで1300点を数える。そのほぼ半分はロシア語による出版物によって占められている。ソ連時代のロシア最大の図書館のデータはV・I・レーニン記念ソ連国立図書館に収められていた。ただし、容易に確認できることだが、スイス、スペインあるいはイタリアの二次的歴史文献、並びに膨大な日本の文献は、同図書館に所蔵されていない。現在までに出版された日露戦争に関するロシアの歴史文献は800点以上である。そのうち最近10～15年間に出版された文献は80点近くに達している。ここで強調しておきたいのは、「ロシアの歴史文献（歴史記述）」という言葉で私が指しているのはロシア語で出版された文献、あるいはロシア国内で出版された文献だけではないという点である。十月革命前の時代にも、ポスト共産主義時代にも、ロシアの歴史記述は世界の歴史記述過程における不可分の一部であり続けている。したがって、ロシアの歴史家によってロシア本国においてロシア語で発表された著作や国外で発表された著作（外国語への翻訳及び外国の歴史家との共著の形で出版された著作を含む）のみに視野を限定しない。さらに、ロシア内外においてロシア語で出版された外国の著作にも注意を払うことが、私に与えられた課題であると考えられる。ただし、繰り返すが、これは戦後の最初の時期及び最近10～15年間ににおける歴史記述のみに限られている。

第1期（1905～1917年）

日露戦争をテーマとする膨大な著作物や出版物は、当然、大きく3つの時期に分けられる。第1期は戦後最初の12年間、すなわち1917年までの時期であるが、この時期には主として軍人、また一部は評論家が日露間の紛争の研究と解釈に携わっていた。1906年9月、戦争の記録を任務とする公式の戦史委員会が、参謀本部総局に設置され、作業

* 訳注：この訳文ではHistoriographyに相当するロシア語の訳語として文脈に応じて「歴史記述」または「歴史文献」が使われている。

を開始した。委員会の構成には陸軍少将 V・I・グルコ委員長のほかに、陸軍大将 3 人を含む参謀本部上級将校 11 人、民間人 20 人以上、合わせて 35 人が加わった。委員会は 4 年余りの期間に戦史文書約 1 万 2000 点を研究し、これに基づいて 9 巻からなる著作物 16 冊が編纂された。その出版は 1910 年に終わった。陸上における軍事行動に関するこの基礎的歴史記録には 500 点以上の図面や地図が添えられていた。しかし、たとえば少将 P・N・シマンスキーのグループなど、委員会のメンバーによって作成された一部の興味深い論文は、この大部の著作物には収められなかった。それらがようやく日の目を見たのは、1990 年代半ばのことであった¹。

他方、海軍軍令本部は 1908 年に独自の歴史委員会を創設し、この委員会が 1917 年まで海軍戦時文書の研究を行った。しかし、委員会は 1904～1905 年の海上における軍事行動についての記録作業を完全には終わることができず、7 巻からなる研究書と 9 冊の文書集がその活動の成果となった。この 7 巻のうち最後の巻は全巻が「対馬作戦」に当てられている。これらの出版物と同じ頃、ロシア最高の軍人たちの個人的著作²、またそれと並んで外国の戦史家、アナリスト及び評論家の著作の翻訳、外国（イギリス及びアメリカ³、日本⁴、フランス⁵、ドイツ⁶、イタリア⁷）の公式文書及び個人文書出版物が現

¹ Россия и Япония на заре XX столетия. Аналитические материалы отечественной военной ориенталистики / Под ред. В.А. Золотарева. М., 1994. [V・A・ゾロタリョフ監修 『20 世紀初頭のロシアと日本』(モスクワ、1994 年)]

² См., напр.: Милютин Д.А. Старческие размышления о современном положении военного дела в России // Известия императорской Николаевской военной академии. СПб., 1912. Вып. 30. [たとえば次の著作を参照。D・A・ミリューチン「ロシアにおける軍事の現状についての老人の思索」『帝室軍事アカデミー通報』第 30 号(サンクトペテルブルク、1912 年)]

³ Гамильтон Я.С.М. Записная книжка штабного офицера во время русско-японской войны. Т. 1-2. Пер. с англ. СПб., 1906-1907; Райт Г.К. С адмиралом Того: Описание семимесячной действительной службы под его командой. Пер. с англ. СПб., 1907; Кеннан Г. Из «Заметок об осаде Порт-Артура». Пер. с англ. // Офицерская жизнь. 1908. № 101, 107, 111, 112, 122, 129/130, 135, 139/140, 147, 150; 1909. № 155, 158 (отдельным изданием – Варшава, 1909); Уайт Р.Д. С Балтийским флотом при Цусиме. Пер. с англ. // Худяков П.К. Путь к Цусиме. М., 1908. С. 185-201; Русско-японская война. Сост. англ. Генеральным штабом. Вып. 1-3. СПб., 1908-1912 и др. [Иан・ハミルトン『日露観戦記』第 1・2 巻(サンクトペテルブルク、1906-1907 年) Ian Hamilton, *A Staff Officer's Scrap-book during the Russo-Japanese War* (London, 1905) からの翻訳、G・K・ライト『東郷大将と共に - その指揮下での 7 カ月間の現役勤務記録 -』英語からの翻訳(サンクトペテルブルク、1907 年) G・ケナン『旅順港包囲戦に関する覚書』英語からの翻訳『将校生活』No. 101, 107, 111, 112, 122, 129/130, 135, 139/140, 147, 150 (1908 年) No. 155, 158 (1909 年)(単行本: ワルシャワ、1909 年) R・D・ホワイト『対馬近海でバルチック艦隊と共に』英語からの翻訳、P・K・フジャコフ『対馬への海路』(モスクワ、1908 年) 185-201 頁、イギリス参謀本部編『日露戦争』第 1～3 巻(サンクトペテルブルク、1906-1912 年) ほか。]

⁴ Описание военных действий на море в 37-38 гг. Мейдзи. Т. 1-4. Пер. с яп. СПб., 1909-1910; Кинай М. Русско-японская война. Официальные донесения японских главнокомандующих сухопутными и морскими силами. Т. 1-2. Пер. с англ. СПб., 1908; «Акацуки» перед Порт-Артуром. (Из дневника японского морского офицера Нирутака). Пер. с нем. СПб., 1905; Ояма (Нагако). Описание упорных боев: Из дневника капитана японской пехоты Ояма (Нагако). Пер. с яп. // *Военно-исторический сборник*. 1912. № 1-4; Сакурай Т. Живые ядра: Очерк боевой жизни японской армии под Порт-Артуром / Предисл. С. Окума. Пер. с англ. СПб., 1909. [『明治 37～38 年海戦史』第 1～4 巻、日本語からの翻訳(サンクトペテルブルク、1909-1910 年) M・キナイ『日露戦争 - 日本陸軍・海軍総司令官の公式報告 -』第 1・2 巻、英語からの翻訳(サンクトペテルブルク、1908 年) 『旅順港直前の暁』(日本海軍将校ニルタカの日記から)ドイツ語からの翻訳(1905 年) オヤマ(ナガコ)「長期戦の記録」(日本陸軍歩兵大尉オヤマ(ナガコ)の日記から)

れ始めた。

戦争原因の説明という点では、世界のいくつかの列強、とくにロシアと日本の地政学的利害と大国主義的野心の極東における衝突という考え方で、ロシアの戦史家たちの意見は一致していた。グルコ委員会のメンバーは、次の2点を確認することにとどまった。すなわち、ロシア側では、まず極東の不凍港、「ブリアムーリエ地方（アムール川中下流域）と帝国のその他の領域とを結ぶことのできる」鉄道に関して、ロシアが死活的な要求を持っていたからである。次に、ロシアの国境をアムール川に沿うように「修正」し、この川をロシア国内の水上交通路とする必要があったことも、理由として挙げられている。日本側については次のように述べられた。「19世紀80年代末に完了した日本帝国の改革は、……今や、はけ口を必要とするほどの力の蓄積をもたらした。余剰人口のための新たな土地、日本の商品のための新たな市場、若き帝国を世界の大国と共通の家族に仲間入りさせるための新たな成功を見出す必要があった。その結果、日本は極東において最も積極的な役割を演じたい、日本国民の活動を最も近い大陸に拡大したいというその長年の欲求の実行を今まさに決意したのである⁸。」二国の利害は、こうして衝突にいたったわけであるが、公式戦史家たちの意見によれば、この対立の中で、戦争の回避は、双方にとって不可能となった。「ロシアがさらに譲歩したとすれば、それは極東における

日本語からの翻訳『戦史資料集』No. 1-4（1912年）櫻井忠温『肉弾 - 旅順実戦記 - 』英語からの翻訳（サントペテルブルク、1909年）]

⁵ *Нодо Л.* Письма о войне с Японией. Пер. с фр. СПб., 1906; *Кан Р.* Из вражеского стана: Из «Дневника военного корреспондента» при японской армии. Пер. с фр. СПб., 1905; *Рэкули Р.* Десять месяцев на японско-русской войне: Беспристрастные очерки и впечатления французского военного корреспондента. Пер. с фр. СПб., 1908 и др. [L・ノド『対日戦に関する書簡』フランス語からの翻訳（サントペテルブルク、1906年）R・カン『敵陣より - 日本軍従軍記者の日記から - 』フランス語からの翻訳（サントペテルブルク、1905年）R・レクリ『日露戦争の10ヵ月 - フランス人従軍記者の公平なルポルタージュと感想 - 』フランス語からの翻訳（サントペテルブルク、1908年）ほか。]

⁶ *Гоенцоллерн К., фон.* На театре русско-японской войны. Очерк принца Карла фон-Гоенцоллерна. Пер. с нем. // *Новое слово.* СПб., 1912. № 2. С. 37-45; *Тертмай Э.* Восемнадцать месяцев в Маньчжурии с русскими войсками. Ч. 1-2. Пер. с нем. СПб., 1907-1908; *Он же.* Куропаткин и его помощники. Поучения и выводы из русско-японской войны. Ч. 1-2. Пер. с нем. СПб., 1913 и др. [K・フォン・ホーエンツォルレルン「日露戦争の舞台で - カール・フォン・ホーエンツォルレルン皇太子のルポルタージュ - 」ドイツ語からの翻訳『ノーヴォエ・スローヴォ』No. 2（サントペテルブルク、1912年）37-45頁、E・テッタウ『ロシア軍との満州での18ヵ月』第1・2部、ドイツ語からの翻訳（サントペテルブルク、1907-1908年）同『クロボトキンとその協力者たち - 日露戦争からの教訓と結論 - 』第1・2部、ドイツ語からの翻訳（サントペテルブルク、1913年）ほか。]

⁷ *Камперю.* Под Ляндянсяном и Ляояном: Из воспоминаний лейтенанта Камперю. Пер. с ит. // *Офицерская жизнь.* 1911. № 265-269. См. также: Русско-японская война в наблюдениях и суждениях иностранцев. Вып. 1-32. СПб., 1906-1914. [カムベリオ「リヤンダンシャンと遼陽の近郊で - カムベリオ中尉回想記から - 」イタリア語からの翻訳『将校生活』No. 265-269（1911年）次の文献も参照。『外国人の観察と判断による日露戦争』第1～32号（サントペテルブルク、1906-1914年）]

⁸ Русско-японская война 1904-1905 гг. Работа Военно-исторической комиссии по описанию русско-японской войны. Т. 1. События на Дальнем Востоке, предшествовавшие войне, и подготовка к этой войне. СПб., 1910. С. 1-3. [『1904～1905年の日露戦争 - 日露戦争の記録に関する戦史委員会の著作 - 』第1巻「戦争に先行して極東で生じた諸事件及びこの戦争に向けた準備」（サントペテルブルク、1910年）1-3頁。]

ロシアの強い影響力と大国としての尊厳に損失をもたらしたであろう。日本がこれと同じ譲歩をしたとすれば、それは日本全島に全面的な革命を引き起こしたかも知れない⁹。」このように、宿命的に不可避なものとして、戦争が開始されたと言われているが、ロシアの公式歴史記述では、ロシア外交の特徴として、妥協性と平和愛好性があることを強調し、武力紛争そのものの開始責任はすべて日本側に帰していた。

当然のことながら、ロシアの戦史家がもっとも解明しなかったのは、ロシアの敗戦原因であった。ただし、自己の所属官庁、最高統帥部、そしてこれが最も重要な点であるが、最高国家権力の威光を最大限擁護する必要があった。そのために、彼らにとってこの課題の解決は何倍も困難なものとなった。結局、戦争の失敗の主たる責任者として宣告を受けたのは、次のように、ロシア対外政策の指導者と一般市民であった。「ロシアの対外政策を決定する立場の指導者は、戦争を十分に予期していなかった。」「我々は、我々の背後にあるヨーロッパについても、……我々の戦闘の舞台（中国）自体についても、正確な理解を有していなかった。」「戦いの負担は、ただ軍にのみ重くのしかかった。軍は、はるか遠く離れた極東で戦ったというだけではなく、その戦いの行方に対して国民大衆が戦争に関心を示さなかったことによっても、ロシア中枢から隔絶されていた」とグルコ委員会のメンバーは強調している。あからさまな形で犠牲に供された軍指導者は、A・N・クロパトキン唯一人である。当時の陸相であった彼は、「我々の極東政策に対して非好意的な態度」を取り、「政府当局の注意を我が国西部方面にそらそうと」試みた。彼の失策が、戦争の前夜及びその過程における、満州へのロシア軍事力の配備増強を遅らせる原因の一つとなったからである¹⁰。その代わり、不埒者集団（周知のようにその背後にはロシア皇帝自身がいた）の戦前における行動は、きわめて高い評価を受けた。公式戦史の著者たちは、彼らの発議によって買い取られた朝鮮北部の森林利権が、軍事戦略上の大きな意義を持った、と指摘している。というのも、利権所有者は「20年間の利権期間全体にわたって、北朝鮮の事実上の支配者となった」からである。その一方で、グルコ委員会は、その商業的利益については副次的に示すにとどめている¹¹。

海軍の戦史研究者もまた、多くの点でこれと同じような縄張り主義的・ご都合主義的な判断によって、戦争を評価することになった。陸軍の同僚の例にならい、彼らは中心的な意義を持つ対馬会戦における敗北の主要責任者として唯一人、バルチック艦隊司令長官 Z・P・ロジェストヴェンスキー海軍大将の責任を追及した。海軍軍令部の参謀たちが下した判決は厳しく明確であった。彼らの意見によれば、この作戦は「十分熟慮されることなく」開始され、その遂行に際しての「熟慮と妥当性はさらに欠けていた。」そ

⁹ 同上、73頁。

¹⁰ 同上、83-84、464-466頁。

¹¹ 同上、25-26頁。

して「戦闘の遂行においても、その準備においても、派遣艦隊司令官の行動には一つとして適切な行動を見つけがたい」と断罪されている¹²。

この大部の研究書の著者たちは、それ以上広い範囲にわたって総括や結論を下そうとはしなかった。とはいえ、彼らによって収集された事実資料の豊富さという点で、彼らの仕事は今日もなお学術的意義を失っていない。

ロシアの半官的な評論や大衆向けの親政府的な文献はこの極東紛争の歴史についてこれと同じ調子で解説していたが、力点の置き方は異なっていた。これらの文献においては、次の点が強調されている。第一に、日本は、開戦時に旅順艦隊を「だまし討ち的に」攻撃した。第二に、その後も西ヨーロッパ海域で第二太平洋派遣艦隊に対して、きわめて狡猾なやり方で攻撃しようと企てた¹³。第三に、ロシア中央部から戦場まではるかに遠く、日本軍に有利な点が多く、同盟国である英米も日本に対して多大な支援を行ったというのだ。帝国の最高司令官の失敗を指摘する代わりに、たとえば、奉天会戦の決定的瞬間に、有名な砂嵐が吹いて、ロシア軍の視界を失わせたなど、ロシア軍に宿命的につきまとった「戦闘上の特別な不運」を力説した。さらに、「生粋の百姓から徴集された」予備兵の士気と戦闘能力の低さも指摘されている。「ロシア全土に広がった無秩序、ストライキその他あらゆる騒擾¹⁴」が満州軍の状態に悪影響を及ぼしたことがとくに強調された。これとは逆に、敵軍は、その国民の不可分の一部として、また、ミカドに狂信的な忠誠を尽くす軍隊として描かれた。日本の兵士と将校は死をまったくものともせず、徹底的に残忍で執念深い人間として描写された。非政府系定期行物もまた、日本人の性格に含まれる、嫌悪感に満ちた「民族的特徴」を、好んで利用した。論者たちの結論は総じて悲嘆にあふれていた。「我々は現実に戦争に負け、数え切れぬほどの損失をこうむり、良いものはまったく何一つ得ることができなかった¹⁵。」

十月革命前の時期には極東における 1904～1905 年の事件に関する一連の「年代記」や「記録文学」が出版された¹⁶。また、参謀の観点から最近の紛争の経験を伝えようと

¹² Русско-японская война 1904-1905 гг. Работа исторической комиссии по описанию действий флота в войну 1904-1905 гг. при Морском Генеральном штабе. Кн. 7. Тсусимская операция. Пг., 1917. С. 218. [『1904～1905年の日露戦争 - 1904～1905年の戦争における艦隊行動の記録に関する海軍軍令本部歴史委員会の著作 -』第7巻「対馬作戦行動」(ペトログラード、1917年)218頁]

¹³ Этой теме была специально посвящена серия статей публициста В.А. Теплова в журнале *Русский вестник* в конце 1904 - начале 1905 гг. Весной 1905 г. эти статьи вышли отдельной брошюрой. - См.: Теплово В. Происшествие в Северном море. Отдельный оттиск из *Русского вестника*. СПб., 1905. [1904年末～1905年初に雑誌『ロシア通報』に発表された評論家V・A・テプロフの一連の論文はとくにこれをテーマに取り上げている。これらの論文は1905年春に単行の小冊子として出版された。V・テプロフ『北海での出来事 - ロシア通報別刷り -』(サンクトペテルブルク、1905年)を参照。]

¹⁴ Русско-японская война. СПб., тип. газ. *Сельский вестник*, 1906. С. 7, 14-17, 20. [「日露戦争」(サンクトペテルブルク:新聞『農村通報』出版局、1906年)7、14-17、20頁。]

¹⁵ 同上、20頁。

¹⁶ Русско-японская война и ее герои. Иллюстрированная хроника войны. Вып. 1-9. СПб., 1904; Иллюстрированная летопись русско-японской войны. Изд. «Нива». Вып. 1-21. СПб., 1904-1905; Головачев

試みる上級将校による分析的著作も何点か出版された¹⁷。公式外交文書集¹⁸、敗北した会戦に参加した指揮官の報告集及び一般兵士の証言集¹⁹、軍事的事件をテーマとする著名な政治家と軍人による論争的著作²⁰が作成され、出版された。

革命前の歴史記述に見られる動きの一つは、軍人²¹だけでなく、民間人²²の戦争参加者や目撃者の回想録、日記及び個人的書簡が出版されたことである。1904～1917年に

В., Ливрон, де А. Хроника военно-морских действий на Дальнем Востоке. СПб., 1906; Русско-японская война 1904-1905 гг. Хронологический перечень действий флота в 1904-1905 гг. / Сост. лейтенант Н.В. Новиков. Вып. 1-2. СПб., 1910-1912 и др. [『日露戦争とその英雄たち - 図説戦記 - 』第1～9巻(サンクトペテルブルク、1904年)、『日露戦争図説年代記』第1～21巻(サンクトペテルブルク:ニワ出版社、1904-1905年)〕 V・ゴロパチェフ、デ・А・リヴロン 『極東における海軍行動記録』(サンクトペテルブルク、1906年) N・V・ノヴィコフ中尉編 『1904～1905年の日露戦争 - 1904～1905年の艦隊行動記録一覧 - 』第1・2巻(サンクトペテルブルク、1910-1912年)ほか。]

¹⁷ Русско-японская война в сообщениях в Николаевской академии Генерального штаба / Под ред. А. Баюва. Ч. 1-2. СПб., 1906-1907; *Парский Д.П.* Воспоминания и мысли о последней войне (1904-1905 гг.). СПб., 1906; *Щеглов А.Н.* Значение и работа штаба на основании опыта русско-японской войны. СПб., 1906; *Грулев М.В.* В штабах и на полях Дальнего Востока: Воспоминания офицера Генштаба и командира полка о русско-японской войне. СПб., 1908-1909 и др. [А・パイオフ監修 『参謀本部ニコライアカデミーでの報告の中の日露戦争』第1・2部(サンクトペテルブルク、1906-1907年) D・P・パルスキー 『一般の戦争(1904～1905年)に関する回想と思索』(サンクトペテルブルク、1906年) A・N・シチェグロフ 『日露戦争の経験に基づく参謀の使命と活動』(サンクトペテルブルク、1906年) M・V・グルレフ 『極東の司令部と戦場で - 参謀本部将校と連隊指揮官の回想 - 』(サンクトペテルブルク、1908-1909年)ほか。]

¹⁸ Сборник договоров и дипломатических документов по делам Дальнего Востока, 1895-1905 гг. СПб., 1906. [『極東に関する条約・外交文書集 - 1895～1905年 - 』(サンクトペテルブルク、1906年。)]

¹⁹ Сборник донесений о Цусимском бое 14 мая 1905 г. [Показания матросов и офицеров 2-й Тихоокеанской эскадры о Цусимском сражении]. СПб., 1907. [『1905年5月14日の対馬戦に関する報告集』(第二太平洋派遣艦隊の水兵・将校の対馬会戦に関する証言)(サンクトペテルブルク、1907年)]

²⁰ *Стессель А.М.* Моим врагам: (Отповедь генерала А.М. Стесселя). СПб., 1907; *Vumme С.Ю.* Вынужденные разьянения по поводу отчета генерал-адъютанта Куропаткина о войне с Японией. СПб., 1909 (2-е изд. - СПб., 1911). [А・M・ステッセリ 『我が敵へ』(A・M・ステッセリ陸軍大将の反駁)(サンクトペテルブルク、1907年) S・Iu・ヴィッテ 『副官クロバトキン陸軍大将による対日戦に関する報告によって余儀なくされた釈明』(初版、サンクトペテルブルク、1909年。第2版、サンクトペテルブルク、1911年)]

²¹ *Адамович Б.В.* Из походного журнала // *Военный сборник*. 1904. № 9-12; 1905. № 1-12; 1906. № 1-4, 6-10, 12; 1907. № 3, 5, 8, 10, 12; 1908. № 5, 6, 10; 1909. № 5-7, 9, 10, 12; 1910. № 5-8; *Апушкин В.А.* Куропаткин: Из воспоминаний о русско-японской войне. СПб., 1908; *Политовский Е.С.* От Либавы до Цусимы: Письма к жене флагманского корабельного инженера 2-й Тихоокеанской эскадры Евгений Сигизмундовича Политовского. СПб., 1906; Письма З.П. Рожественского к О.Н. Рожественской // *Море*. Научно-литературный морской журнал-сборник. 1911. № 6 и др. [B・V・アダモヴィチ 『行軍日誌から』 『戦争論集』 No. 9-12 (1904年) No. 1-12 (1905年) No. 1-4, 6-10, 12 (1906年) No. 3, 5, 8, 10, 12 (1907年) No. 5, 6, 10 (1908年) No. 5-7, 9, 10, 12 (1909年) No. 5-8 (1910年) V・A・アプシキン 『クロバトキン - 日露戦争回想記から - 』(サンクトペテルブルク、1908年) Ie・S・ポリトフスキー 『リバワから対馬まで - 第二太平洋派遣艦隊旗艦工兵エヴゲニー・シギズムンドヴィチ・ポリトフスキーから妻への手紙 - 』(サンクトペテルブルク、1906年) 『Z・P・ロジエストヴェンスキーから O・N・ロジエストヴェンスキーへの手紙』 『海』(学術的・文学的航海日誌集) No. 6 (1911年)ほか。]

²² *Боткин Е.С.* Свет и тени русско-японской войны 1904-1905 гг. (Из писем к жене). СПб., 1908; *Гарин-Михайловский Н.Г.* Дневник во время войны. Пг., 1916; *Паплов Е.В.* На Дальнем Востоке в 1905 году: Из наблюдений во время войны с Японией. СПб., 1907; *Самокиш Н.С.* Моя поездка на войну: Из воспоминаний академika Н.С. Самокиша // *Новый мир*. 1905. № 10. С. 109-112 и др. [Ie・S・ボトキン 『1904～1905年の日露戦争の光と陰』(妻への手紙から)(サンクトペテルブルク、1908年) N・G・ガリン = ミハイロフスキー 『戦時日記』(ベトログラード、1916年) Ie・V・バヴロフ 『1905年極東にて - 対日戦時の観察から - 』(サンクトペテルブルク、1907年) N・S・サモキシ 『戦場への我が旅 - アカデミー会員 N・S・サモキシの回想から - 』 『新世界』 No. 10 (1905年) 109-112 頁ほか。]

けるその出版点数は合計 350 点以上である²³。これらは、『軍事論集』、『過ぎし歲月』、『海』、『将校生活』、『国境警備隊員』、『斥候兵』などの歴史雑誌やテーマ別の論集に、最も多く発表された。また、一部は単行書の形で、しかも一度ならず出版された。たとえばジャーナリスト、I・P・タブルノの著作『戦争の実相』はすでに 1905 年中に版を重ね、第二太平洋派遣艦隊史料編修員 V・I・セミヨーノフ海軍中佐の有名な『清算』は、第一次世界大戦までの間に 6 回も版を重ねた。出版された個人的な回想記その他の資料は、その重要性は様々であるとしても、日露紛争における事実上あらゆる軍事的事件やエピソードを取り上げている。

革命前の半官的な歴史記述において、「ロシア国内の社会運動と戦争」というテーマは、十分に検討されなかった。ほとんど常に、「国民大衆」、知識層、少数民族代表者が、軍の利益をないがしろにしている、と非難された。とくに、少数民族代表者は、ロシアからの分離主義を批判されている。あるいはロシア軍の極東での戦闘能力を弱体化させた要因として、国内各県における革命的雰囲気醸成を指摘するだけで事は済まされた。革命家たちが日本政府と関係を持っていたという非難が、最も説得力のある形で提起されたのは、『革命の内幕 - 日本の資金によるロシア国内武装蜂起 - 』と題する出版物においてである。この出版物は A・S・スヴォーリンが所有するペテルブルグ最大の民間出版社から 1906 年夏に出版された。この本には、ロシアの防諜機関によって押収された文書の写真複写が掲載されていた。すなわち、日本の元駐露日本公使館付陸軍武官、明石元二郎陸軍大佐が 1905 年上半期にロシアの社会運動指導者との間で交わした極秘書簡である。この往復書簡により、日本政府がロシアの革命家に援助資金を直接与えていたことが疑いもなく明らかになった。にもかかわらず、『革命の内幕』は、ロシア全土におけるセンセーションとはならなかった。ロシアの著名な自由主義者でカデット（立憲民主党）の指導者の一人、I・I・ベトルンケヴィチは、この事件について次のように回想している。「ロシア軍が日本との戦いで失敗を喫し始めると間もなく、ロシアの社会活動家と言論界が日本人によって買収されているとの噂が政府の手先たちによって流された。これは軍当局と民政当局の責任を社会と社会活動家に転嫁する目論見によるものだった。無論、この噂を信じた者は一人もおらず、その本当の意味は誰の目にも明らかだ

²³ Подсчитано по: История дореволюционной России в дневниках и воспоминаниях: Аннот. указ. книг и публикаций в журн. / Гос. б-ка СССР им. В.И. Ленина, Гос. Публ. б-ка им. М.Е. Салтыкова-Щедрина, Б-ка Академии наук СССР, Науч. б-ка Моск. Гос. ун-та, Гос. публ. ист. б-ка; Науч. руковод., ред. и введ. проф. П.А. Зайончковского. В 4-х т. Т. 4. Ч. 1. М., 1983. С. 266-333. [この点数は次の文献に基づいて計算した。V・I・レーニン記念ソ連国立図書館、M・Ie・サルティコフ=シチェドリノ記念国立公共図書館、ソ連科学アカデミー図書館、モスクワ国立大学学術図書館、国立公開歴史図書館（P・A・ザイオンチコフスキー学術指導・監修・序文）『日記と回想録に見る革命前ロシア史 - 単行書・雑誌記事の注釈付き参考文献目録 - 』全 4 巻（モスクワ、1976-1986 年）のうちの第 4 巻第 1 部（モスクワ、1983 年）266-333 頁。]

った²⁴。」そのため、この小冊子の出版人は「ロシア革命のための資金は外国から受け取ったものだ、と我々が言うと、嘲笑されたものだ²⁵」と認めざるをえなかった。主要当事者であるロシア政府自体もこのテーマを精査しようとはしなかった。ロシア政府は1906年から日本との関係調整の道を進み始め、ついこの間までの敵国との間で同盟関係を確立した。

現代の地政学専門家が断定するところによれば、対日戦に敗北した結果、政府当局者はしばらくの間、極東問題への関心を失った。そして、ロシアの国家安全保障に対する主要な脅威を探る中で、バルカン半島、黒海海峡、カフカス、近西アジア及び中央アジアを包摂する「伝統的」セクターに視線を向けるようになった²⁶。それにもかかわらず、政府周辺の評論界では、戦後も「黄禍」をテーマとする論文が発表され続けた。これは、スヴォーリンの新聞『新時代』がすでに日露戦争前夜に論じ始めたテーマであり、極東におけるロシアと日本の地政学的利害の衝突に関する公的歴史家による最新の論議のバリエーションとなっていた。しかし、今や、この脅威はロシアの評論家たちによって以前とは異なった解釈をされるようになった。「ヴァンダム」という偽名で書いていた現役将校 A・Ie・エドリヒンは、主要な危険性を日英同盟のうちに認めた。すなわち、「ロシア人とアングロサクソン人との間の巨人同士の戦い」が到来し、世紀の中心的なテーマになる、というのだ。この戦いに向けて、ロシアは全力を尽くして準備を進めるべきである、というのが彼の見解であった²⁷。歴史家で評論家の L・M・ボルホヴィチノフは、中国によるブリアムーリエ地方の植民地化を最も憂慮していた²⁸。ジャーナリストの D・G・ヤンチェヴェツキーは、次のように考えていた。極東ロシア領だけでなく、ロシア全土に全面的な危険が迫りつつある。その人種、文化、政治、経済のすべてにわたる危険として、「黄禍」を認識すべきだ、と国民に訴えた。13世紀のモンゴル・タタール襲来に類する新たな「黄色人種の襲来」を回避することが必要だ。そのためには、一

²⁴ *Петрункевич И.И. Из записок общественного деятеля. Воспоминания / Под ред. А.А. Кизеветтера. Прага, 1934. С. 390. [I・I・ペトルンケヴィチ (A・A・キゼヴェツェル監修) 『社会活動家の覚書から - 回想記 - 』(ブラハ、1934年) 390頁。]*

²⁵ *Дневник А.С. Суворина / Под ред. М. Кричевского. М.-Пг., 1923. С. 342. [М・クリチェフスキー監修 『A・S・スヴォーリンの日記』(モスクワ及びペトログラード、1923年) 342頁。]*

²⁶ *Улунян Ар.А. Балказия и Россия. Структура угроз национальной безопасности Российской империи на Балканах, в Центральной и Передней Азии в представлениях российской военной и гражданской бюрократии (1900-1914). М., 2002. С. 214, 300. [Ar・A・ウルニャン 『バルカジア(「バルカジア」は「バルカン・アジア」を意味する造語)とロシア - ロシアの軍・文民官僚の認識におけるバルカン半島、中央アジア及び近西アジアにおけるロシア帝国国家安全保障に対する脅威の構造(1900~1914年) - 』(モスクワ、2002年) 214、300頁。]*

²⁷ *Вандам А. Величайшее из искусств. Обзор современного международного положения при свете высшей стратегии. СПб., 1913. С. 48. [A・ヴァンダム 『最も偉大な芸術 - 最高戦略に照らした現今国際情勢の展望』(サンクトペテルブルク、1913年) 48頁。]*

²⁸ *Болховитинов Л.М. Колонизация Дальнего Востока // Великая Россия. Сб. статей. М., 1912. [L・M・ボルホヴィチノフ 『極東の植民地化 - 偉大なロシア - 』(論文集)(モスクワ、1912年)]*

方では「シベリアとブリアムーリエにおける我が国の経済的・軍事的影響力を絶えず強化する。」他方、「北満州におけるあらゆる植民地開拓企業と利権企業」を放棄する。そして、「日本あるいはそれ以外の強国がそこで何を行おうとも」、「我々のすべてのアジアの隣人との最も友好的な関係」の確立に向けて進路を取らなければならないと結んでいる²⁹。この地域におけるロシア外務省のその後の平和政策から判断すると、ヤンチェヴェツキーの訴えの一部は、ペテルブルクまで聞き届けられたように思われる³⁰。

日露戦争に関するロシア語による歴史記述の発展第1段階の結果は、膨大な事実資料、主としてこの紛争の軍事的構成要素に関する資料が世に出されたことである。ただし、紛争の総括と意味づけの試みはきわめて乏しく、しかも往々にして都合主義的なものであった。他方、外交史、極東政策の問題をめぐるロシア支配層内部の闘争、ロシアにおける革命運動の展開に対する戦争の影響など、この戦争の一連の重要な側面は、事実上、歴史研究の埒外に取り残された。

第2期（1917～1991年）

戦争に関するロシア語による歴史記述の発展第2期は、1917年から1980年代と1990年代との境目の時期までである。この70年間のうち大部分の期間を通じて、ロシア語による歴史記述全般、とくに日露戦争に関する歴史記述は、相互に結び付きのない並行する二つの流れをなしていた。かつては同じ一つの国の市民だった二つの流れの参加者たちは、相手の存在を実際に知らないでいる場合もあった。だが、とくにソビエト歴史学派に際立っているのだが、むしろ意識的に相手を無視している場合のほうが多かった。総じて言えば、亡命者によるロシア語での歴史記述は、これに先行する時期に敷かれた

²⁹ Янчевецкий Дм. Гроза с Востока. 2-е изд. Ревель, 1908. С. 48-51. См. также: Табурно И.П. Как наилучшим образом обеспечить свободное развитие России на Дальнем Востоке и неприкосновенность ее границ. Доклад, прочитанный в собрании армии и флота 5 марта 1908 г., и прения по этому вопросу. СПб., 1908. [Дм・ヤンチェヴェツキー『東からの脅威』第2版（レーヴェリ、1908年）48-51頁。次の文献も参照。I・P・タブルノ「極東におけるロシアの自由な発展とロシア国境の不可侵性は如何にすれば最良の方法で確保し得るか」（1908年3月5日に開催された陸海軍会議で行われた報告及びこの問題に関する討論）（サンクトペテルブルク、1908年）]

³⁰ Опасения относительно «желтой угрозы» разделяли и некоторые крупные военные деятели. В июне 1905 г. Куропаткин писал генералу А.Ф. Редигеру: «Верю, что победа, наконец, склонится на нашу сторону... В этом спасение не только России, но и Европы. Иначе 700 миллионов азиатов под главенством Японии сделают попытку прописать законы Европе, начав с России в Сибири». – Цит. по: Редигер А.Ф. История моей жизни. Воспоминания военного министра. В 2 т. Т. 1. М., 1999. С. 423. [「黄禍」に対する危惧については軍部の一部の大物も同じ見解を持っていた。1905年6月、クロバトキンはA・F・レジゲル陸軍大将に次のように書き送っている。「勝利は最後には我が方に傾くと私は信じている。……ロシアだけでなく、ヨーロッパ全体の救いはこれにかかっている。さもなければ、日本の主導の下に7億のアジア人がロシアのシベリアを手始めとして、ヨーロッパのために法令を書こうと試みることとなる。」- A・F・レジゲル『我が人生の歴史 - 陸軍大臣の回想記 -』第1巻（全2巻）I・O・ガルクシ、V・A・ゾロタリヨフ監修（モスクワ、1999年）423頁より引用。]

路線を進んだ。1930年代における戦史家 A・A・ケルスノフスキーの浩瀚な著作の出現は、我々が関心を持っている側面において、その最も顕著な事件となった。この著作の第3巻の一部は日露戦争に当てられている³¹。ここでは、次の点が問題にされた。すなわち、1899年の第一回ハーグ国際平和会議の「紙切れ」にロシア政府が調印した。その後におけるハーグ条約の精神を遵守しようと努力した。また、「国務相ベゾブラゾフに率いられたペテルブルクの無原則な山師集団」が、戦争前夜において無責任な行動をとったことである。彼の著作は、そうしたロシアの「平和主義的幻想」に対して、辛らつに批判したという点で、十月革命前の時期の他の著作と異なっている。一方で、満州での戦闘行動そのものの過程における、ロシア最高司令部の「才人たち」の功績を称えることも、彼は忘れなかった。「臆病者」のクロパトキンが一貫して追及した「クトゥーゾフ的」戦術について、ケルスノフスキーはどうしても理解できなかった。とはいえ、後任の総司令官であるリネヴィチ「爺さん」にも、戦略的な堪が欠けている、と独特の皮肉をこめて指摘した。ケルスノフスキーは、次のとおり推測している。「もしリネヴィチに戦略的堪が備わっていたとすれば、戦争は勝っていたかも知れない。そして、それ以後のロシアの歴史全体は別の方向に進む可能性があった。」「リネヴィチが、もし(1905年夏に)四平から攻撃に転じていれば、ロシアは1905年の第一革命の不幸も、1914年の第一次世界大戦への無謀な参戦も、1917年の革命による破局も知ることはなかったであろう³²。」

ソビエト歴史学は、これとはまったく別の道を選んだ。「階級的・プロレタリア的」な観点に立って、日露戦争を解釈すべきだ、と主張した。そして、この戦争の起源と性格の問題、ロシア自体の内部における社会・政治闘争の歴史に注目した。また後には、19世紀と20世紀の境目の時期の極東における国際関係の問題に関心を向けるようになった。その結果、これらの問題の研究においては、ソビエト歴史学によって最大の前進が達成された。戦争術の歴史という観点からの戦争研究は続けられたが、もはや「第二義的」なものとして進められるようになった³³。解釈の点で最も論議を呼んでいるこの紛

³¹ Керсновский А.А. История русской армии. Т. 1-4. Белград, 1933-1938. [A・A・ケルスノフスキー『ロシア軍史』第1～4巻(ベオグラード、1933-1938年)。]

³² 同上、第3巻、83頁。

³³ См.: Левцкий Н.А. Русско-японская война 1904-1905 гг. М., 1938; Колчин Б., Разин Е. Оборона Порт-Артура в русско-японскую войну 1904-1905 гг. М., 1939; Егорьев В.Е. Операции Владивостокских крейсеров в русско-японскую войну 1904-1905 гг. М.-Л., 1939; Русско-японская война 1904-1905 гг. Действия сухопутных войск. Сб. док. М., 1941; Быков П.Д. Русско-японская война 1904-1905 гг. Действия на море. М., 1942. [N・A・レヴィツキー『1904～1905年の日露戦争』(モスクワ、1938年) B・コルチン、Ye・ラジン『1904～1905年の日露戦争期における旅順港防衛』(モスクワ、1939年) V・Ye・エゴリエフ『1904～1905年の日露戦争期におけるウラジオストク巡洋艦の作戦』(モスクワ及びレニングラード、1939年)『1904～1905年の日露戦争-陸軍の行動-』(報告論文集)(モスクワ、1941年) P・D・ブイコフ『1904～1905年の日露戦争-海上行動-』(モスクワ、1942年)を参照。]

争の個々のエピソード、たとえば「ハル事件(ドッガーバンク事件)」³⁴、さらに帝政ロシアにおける日本のスパイ活動の歴史³⁵をテーマとする出版物が、ソビエト出版界に次第に現れ始めた。後者の出現は1930年代の極東における国際的緊張の高まり、また、それと同時にソ連自体の国内における公然たる「魔女狩り」によるところが大きい。20世紀初頭におけるロシア防諜機関の失敗を例に、日本の秘密諜報機関との戦いにおいて警戒心を高めなければならないという考えがソ連の読者にたたき込まれた。

ソ連の著者の著作においては「ブルジョア的・地主的歴史記述にあるすべての著作を作り変えよ³⁶」というスローガンが鳴り響いていた。長い間、彼らの著作においてはあらかじめ決定された一連の課題のみが取り扱われた。すなわち、専制体制の全面的腐敗の呈示、「唯一信頼すべき」ポリシェヴィキの敗北主義的戦術の無条件かつ全面的な正当化、ロシアにおける革命的危機の先鋭化に対して軍事事件が及ぼした巨大な影響の立証である。そして、このような点に関する公式見解と、あらゆる異論に対して、厳しい批判が繰り返され、異論の出版は許されなかった。このように叙述された日露戦争史は、結局のところ専制体制の崩壊の不可避性、その後に来るべきポリシェヴィキ革命の合理性を、読者に植え込まずにはおこななかった。その本質において、学究的というよりは、むしろ煽動的・宣伝的なこのような歴史研究の傾向は「政治的・評論的先鋭性」と呼ばれ、全面的に歓迎された。1930年代から1950年代にかけて主に講演の速記録や要約³⁷の形で大量に出現した日露戦争史に関する総論的著作は、まさにこのような最良の場合でも一般向けの啓蒙的な性格を持っていた。

ソ連時代は、20世紀初頭のマルクス主義者にならぬ、極東におけるツァーリズムの政策を「人民の利益とまったくかけはなれたもの」と断罪した。日本との戦争を遂行し、

³⁴ *Новиков Н.В.* Гулльский инцидент и царская охранка // *Морской сборник*. 1935. № 6; *Могилевич А., Айрапетян М.* Легенда и правда о «гулльском инциденте» // *Исторический журнал*. 1940. № 6. [N・V・ノヴィコフ「ハル事件と帝政ロシア秘密警察」『海軍論集』No. 6 (1935年) A・モギレヴィチ、M・アイラペチャン「『ハル事件』の伝説と真相」『歴史雑誌』No. 6 (1940年)]

³⁵ *Вотинов А.П.* Японский шпионаж в русско-японскую войну 1904-1905 гг. М., 1939; Японский шпионаж в царской России. Сб. док. / Под ред. П. Софинова. М., 1944; Из истории русской контрразведки. Сб. документов / Сост. И. Никитинский. М., 1946. [A・P・ヴォチノフ『1904～1905年の日露戦争期における日本のスパイ活動』(モスクワ、1939年) P・フィノフ監修『帝政ロシアにおける日本のスパイ活動』(報告論文集)(モスクワ、1944年) I・ニキチンスキー編『ロシア防諜機関の歴史から』(文書集)(モスクワ、1946年)]

³⁶ *Лучинин В.* Русско-японская война 1904-1905 гг. Библиографический указатель. М., 1939. С. 4. Введение. [V・ルチニン『1904～1905年の日露戦争 - 参考文献目録 - 』(モスクワ、1939年) 4頁、序文。]

³⁷ См.: *Сидоров А.Л.* Русско-японская война (1904-1905 гг.). Стенограмма лекции. 1-е изд. М., 1939; М., 1946 (два издания); *Сидоров А.Л., Панкратова А.М.* Русско-японская война. Первая буржуазно-демократическая революция в России (1905-1907 гг.). Лекции. М., 1951; *Черменский Е.Д.* Русско-японская война 1904-1905 гг. Лекции. 1-е изд. М., 1953; 2-е изд. М., 1954 и др. [A・L・シードロフ『日露戦争(1904～1905年)』(講演速記録)(初版、モスクワ、1939年。第2版及び第3版、モスクワ、1946年) A・L・シードロフ、A・M・パンクラトワ『日露戦争 - ロシアにおける第一次ブルジョア民主主義革命(1905～1907年)』(講演)(モスクワ、1951年) Ie・D・チェルメンスキー『1904～1905年の日露戦争』(講演)(初版、モスクワ、1953年。第2版、モスクワ、1954年)ほかを参照。]

結局これに敗北したのは、ロシアの兵士ではない。ロシア兵士は、満州において模範とすべき不屈さと英雄主義を発揮した。一方で、将校は、ほとんど一人残らず凡庸・臆病であり、官僚は、無能で賄賂に弱かった。こうした将校や官僚を抱えるツァーリ体制こそが、敗北の元凶であったと主張された。ただし、ロシアの敗北は幸いだった、とも判定された。なぜなら、敗北は一方では「ロシア人民の最悪の敵」である専制体制の弱体化をもたらし、他方では国内革命運動の強化と加速化を引き起こしたからである。終戦と対日講和条約の調印は、第一次ロシア革命敗北の原因の一つとみなされた。この一般図式は、1930年代半ばに『全連邦共産党（ポリシェヴィキ党）史小教程』の著者たちによって作り上げられている。それは、最小限の修正は受けたものの、ソビエトの歴史記述全体が崩壊するまで存続した³⁸。当然ながら、亡命派の著者たちにとって、このようなアプローチや評価は、受け入れられないものだった。

先に述べた二つの構成要素へのロシア語歴史記述の最終的分裂が生じたのは、ポリシェヴィキ革命直後ではない。1920年代末から1930年代初頭にかけて、イデオロギーのカーテンが、まさに本当の「鉄のカーテン」となった時期のことである。十月革命直後の時期には、ロシア国内ではすでに始められていた公式外交文書及び軍事文書³⁹の出版が継続されていた。とくに出版されていたのは個人的資料で、それは同時に国外でも印刷された。この時期には、主として、その文書が様々な理由によって、完全に、または部分的にタブー化されていた人物、ただ単に忘れられていた人物、あるいはその文書が初めて現れた人物がテーマとなった。すなわち、皇帝及びロマノフ家の皇族⁴⁰、陸軍大将のA・N・クロパトキン、P・N・リネヴィチ、A・S・ルコムスキー、M・V・グルレフ⁴¹、政治家のA・M・アバザ、A・M・ベソブラゾフ、S・Iu・ヴィツテ、V・N・ラ

³⁸ См.: История ВКП(б). Краткий курс. М., 1934. С. 52-53, 89; Ярославский Е.М. Русско-японская война и отношение к ней большевиков. М., 1939; История Коммунистической партии Советского Союза. В 6 томах. Т. 2. М., 1966. С. 10-14; История русско-японской войны 1904-1905 гг. / Под ред. И.И. Ростунова. М., 1977. С. 45-47 и др. [『全連邦共産党（ポリシェヴィキ党）史小教程』（モスクワ、1934年）52-53、89頁、Ie・M・ヤロスラフスキー『日露戦争とこれに対するポリシェヴィキの態度』（モスクワ、1939年）『ソ連共産党史』第2巻（全6巻）（モスクワ、1966年）10-14頁、I・I・ロストウノフ監修『1904～1905年の日露戦争の歴史』（モスクワ、1977年）45-47頁ほかを参照。]

³⁹ Сборник договоров и других документов по истории международных отношений на Дальнем Востоке / Сост. Э.Д. Гримм. М., 1927; Русско-японская война. Изд. Централрхива. М., 1925. [E・D・グリム編『極東国際関係史に関する条約等文書集』（モスクワ、1927年）『日露戦争』（モスクワ：中央文書館出版局、1925年。）]

⁴⁰ Переписка Вильгельма II с Николаем II, 1894-1914. М., 1923; Дневник Николая Романова / Публ. А.А. Сергеева // *Красный архив*. 1927. Т. 1-3; Дневники императора Николая II. Берлин, 1923; Вел. князь Константин Константинович. Из дневника Константина Романова // *Красный архив*. 1930. Т. 6; 1931. Т. 1-2 и др. [『ウイヘルム2世とニコライ2世の往復書簡 - 1894～1914年 - 』（モスクワ、1923年）『ニコライ・ロマノフの日記』A・A・セルゲエフ刊行『赤色アルヒーフ』第1～3巻（1927年）『皇帝ニコライ2世の日記』（ベルリン、1923年）コンスタンチン・コンスタンチノヴィチ大公「コンスタンチン・ロマノフの日記から」『赤色アルヒーフ』第6巻（1930年）第1・2巻（1931年）ほか。]

⁴¹ Воспоминания генерала А.С. Лукомского. Т. 1. Берлин, 1922; Куропаткин А.Н. Дневник, 1902-1906 // *Красный архив*. 1922. № 2; 1924. № 5, 7; 1925. № 1; 1935. № 1-3; Дневник А.Н. Куропаткина / Под ред. М.Н. Покровского. Б.М., 1923; Русско-японская война: Из дневников А.Н. Куропаткина и П.Н. Линевица. Л.,

ムズドルフ、A・P・イズヴォリスキー⁴²、極東総督府付外交官房長 G・A・プランソン⁴³、駐日大使 R・R・ローゼン男爵⁴⁴、ポーツマス講和のロシア側代表団書記 I・Ia・コロストヴェツ⁴⁵、影響力のある出版経営者で評論家の A・S・スヴォーリン、警察局長 A・A・ロプーヒン⁴⁶、第二太平洋艦隊の準備と極東遠征に参加した海軍将校たち⁴⁷、また、それより有名でも「名門の出」でもない戦争の参加者及び同時代人たち⁴⁸である。しかし、これらの資料は、ほとんど常に抜粋の形で出版され、一定の傾向を持った注釈を伴っていた。そのイデオロギー性は、ソ連国内における「階級闘争の激化」が進むにつれて、増大する一方だった。1930年代半ばから1980年代～1990年代の境目の時期まで、ロシアの大物政治家、軍人、社会活動家に関する研究、また、彼らの文書の出版は、暗黙のうちに禁止されていた。わずかに1950年代末から1960年代初めにかけて、フルシチョフの「雪解け」時代にのみ、帝政時代の高官、司令官、彼らの同僚及び家族の一連の回想⁴⁹が現れた。その中では、論争の余地なく S・Iu・ヴィッテ伯爵の回想記が中心的

1925; *Грулев М.В.* Записки генерала-еврея. Париж, 1930. [『A・S・ルコムスキー陸軍大将回想記』第1巻(ベルリン、1922年) A・N・クロパトキン「日記 1902～1906年」『赤色アルヒーフ』No. 2 (1922年) No. 5, 7 (1924年) No. 1 (1925年) No. 1-3 (1935年) M・N・ボクロフスキー監修『A・N・クロパトキンの日記』(出版地不明、1923年)、『日露戦争 - A・N・クロパトキンと P・N・リネヴィチの日記から - 』(ロンドン、1925年) M・V・グルレフ『ユダヤ人陸軍大将の覚書』(パリ、1930年)]

⁴² Приложение; Безобразовский кружок летом 1904 г. // *Красный архив*. 1926. № 27; *Витте С.Ю.* Воспоминания. Т. 2-3. Берлин, 1922-1923; *Витте С.Ю.* Воспоминания. Т. 1-3. М.-Пг., 1923-1924; *Извольский А.П.* Воспоминания. Пер. с англ. М.-Пг., 1924; Русские финансы. 1904-1906 г. Изд. Централрхива. Б.м., б.г. [「付録 - 1904年夏のペゾブラゾフサークル - 』『赤色アルヒーフ』No. 27 (1926年) S・Iu・ヴィッテ『回想記』第2・3巻(ベルリン、1922-1923年) S・Iu・ヴィッテ『回想記』第1～3巻(モスクワ及びベトログラード、1923-1924年) A・P・イズヴォリスキー『回想記』英語からの翻訳(モスクワ及びベトログラード、1924年)、『ロシアの財政 1904～1906年』(出版地不明: 中央文書館出版局、出版年不明)]

⁴³ В штабе адмирала Е.И. Алексеева: (Из дневника Е.А. Плансона) / Предисл. А. Попова // *Красный архив*. 1930. Т. 4/5. С. 148-204. [「Ie・I・アレクセエフ海軍大将の司令部で (Ie・A・プランソンの日記から)』A・ポポフ序文『赤色アルヒーフ』No. 4/5 (1930年) 148-204頁。]

⁴⁴ R. Rosen, *Forty Years of Diplomacy*(New York, 1922).

⁴⁵ *Коростовец И.Я.* Мирные переговоры в Портсмуте в 1905 году: Дневник И.Я. Коростовца, секретаря графа С.Ю. Витте во время Портсмутской конференции. Июль-сентябрь 1905 г. // *Былое*. 1918. № 1-3, 6. [「I・Ia・ロストヴェツ「1905年のポーツマス講和交渉 - ポーツマス会議時の S・Iu・ヴィッテ伯爵秘書 I・Ia・コロストヴェツの日記 1905年7～9月 - 』『過ぎし歲月』No. 1-3, 6 (1918年)]

⁴⁶ *Лопухин А.А.* Отрывки из воспоминаний: (По поводу «Воспоминаний» графа С.Ю. Витте) / С предисл. М.Н. Покровского. М.-Пг., 1923. [「A・A・ロプーヒン『回想記断片 (S・Iu・ヴィッテ伯爵『回想記』について)』M・N・ボクロフスキー序文(モスクワ及びベトログラード、1923年)]

⁴⁷ С эскадрой адмирала Рожественского. Сб. статей и воспоминаний. Прага, 1930. [『ロジェストヴェンスキー海軍大将の派遣艦隊と共に』(論文・回想記集)(プラハ、1930年)]

⁴⁸ *Демидова С.И.* [дочь министра двора И.И. Воронцова-Дашкова] Из воспоминаний // *Голос минувшего*. М., 1923. № 1; *Баженов В.П.* [младший врач 35-го Восточно-Сибирского стрелкового полка] Японская кампания. Тула, 1926; *Новиков-Прибой А.С.* [баталер броненосца "Орел"] Цусимская могила: Воспоминания участника // *Огонек*. 1930. № 15. [「S・I・デミドワ (I・I・ヴォロンツォフ=ダシコフ宮内大臣の娘)「回想記から」』『過ぎし時の声』No. 1 (モスクワ、1923年) V・P・バジェノフ(第35東シベリア歩兵連隊軍医尉官)『日本の作戦活動』(トゥーラ、1926年) A・S・ノヴィコフ=プリボイ(装甲艦「アリオール」主計下士官)『対馬の墓 - 参加者回想記 - 』『アガニョーク』No. 15 (1930年)]

⁴⁹ Дневник полковника С.А. Рашевского (Порт-Артур, 1904) / С предисл. А.Л. Сидорова. М.-Л., 1954; *Виттефорт А.В.* [лейтенант броненосца «Сисой Великий», сын адмирала В.К. Виттефорта] Воспоминания /

位置を占めていた。20世紀初頭のロシアの大物政治家の手になる、この壮大できわめて内容豊かな回想記は世に出るとすぐ、ソ連国内では稀覯本となった。2003年には、同書が、省略なしで詳細な注釈付きで再販されている⁵⁰。

ソ連の歴史家は日露戦争との関係で第一次ロシア革命の諸事件に特別の関心を持っていた。にもかかわらず、日本からロシアの社会運動に提供された財政援助の分配、また、日本の資金で購入された武器の輸送船「ジョン・グラフトン号」によるロシアへの秘密輸送（1905年夏）について、触れられることはなかった。それに、ロシア社会民主労働党ボリシェヴィキ派の指導者たちが参加しようとした事実は、秘密事項として隠し通された。当然、ソ連の歴史記述においてはこの件やこれに近いテーマについての研究は問題にもならなかった。

公認イデオロギー、すなわち最初は「レーニン・スターリンの天才的学説」、後には「永遠に不滅なマルクス・レーニン主義」への忠誠が、歴史学著作物において欠くべからざるものとなった。研究者たちは、レーニンとその同志や賛同者が当時のボリシェヴィキ派出版物の中で表明した理念と評価は、日露戦争についての理解の根底をなしていると研究者たちは倦むことなく強調した。しかし、これらの著作は、狭い党派的立場に立脚した当時の政治的憎悪の中に深く迷い込んでしまった。そこには、ロシア政府に対する非難と日本に対する過度の賞賛、そして戦争の政治的な帰結と影響についての予見が含まれていた。しかし、この予見は、結果としてその正しさが立証されることは、まったくなかった。ボリシェヴィキ指導者は、ロシアの「専制的な時代遅れの政府」を、日本の「政治的に自由で急速に文化的進歩を遂げつつある人民」と対比した。そして、「専制体制を粉碎した日本ブルジョアジーによって、遂行されるべき革命的課題」について論じることを好んだ⁵¹。レーニンは、1904年2月に次のように書いている。「(ロシアが)

С предисл. А.Л. Сидорова // *Исторический архив*. 1960. № 4. С. 111-141; *Кобеляцкая Л.В.* [дочь генерала В.Ф. Белого] Порт-Артур, 1904... // *Родина*. 1962. № 2; *Гринцевич И.И.* [подпоручник 14-го Восточно-Сибирского стрелкового полка] Герой обороны Порт-Артура: (К 60-летию со дня гибели генерала Р.И. Кондратенко) // *Военно-исторический журнал*. 1964. № 12; Порт-Артур. 1904 г.: Дневник капитана Лилье [Отрывки] // *Наука и жизнь*. 1964. № 6. С. 33-39; *Лопухин Б.В.* [директор департамента МИД] Люди и политика (конец XIX – начало XX в) / Вступит. статья А.П. Погребинского // *Вопросы истории*. 1966. № 9-11. [『S・A・ラシェフスキー陸軍大佐の日記(旅順港、1904年)』A・L・シードロフ序文(モスクワ及びレニングラード、1954年) A・V・ヴィトゲフト(装甲艦「シソイ・ヴェリーキー」海軍尉官、V・K・ヴィトゲフト海軍大将の息子)「回想記」A・L・シードロフ序文『歴史アルヒーフ』No. 4 (1960年) 111-141頁、L・V・コベリヤツカヤ(V・F・ペールイ大将の娘)「旅順港 1904年」『祖国』No. 2 (1962年) I・I・グリーンツェヴィチ(第14東シベリア歩兵連隊陸軍少尉)「旅順港防衛の英雄(R・I・コンドラチェンコ大将戦死60周年に寄せて)」『軍事史雑誌』No. 12 (1964年)「旅順港 1904年 - リリ工艦長の日記(抜粋) - 」『科学と生活』No. 6 (1964年) 33-39頁、B・V・ロプーヒン(外務省局長)「人々と政治(19世紀末~20世紀初頭)」A・P・ポグレブンスキー序論『歴史学の諸問題』No. 9-11 (1966年)]

⁵⁰ *Витте С.Ю.* Воспоминания / С предисл. А.Л. Сидорова. Т. 1-3. М., 1960. [S・Iu・ヴィッテ『回想記』A・L・シードロフ序文、第1~3巻(モスクワ、1960年)]

⁵¹ *Ленин В.И.* Полн. Собр. Соч. Т. 8. С. 170; Т. 9. С. 152, 155-158. [V・I・レーニン『全集』第8巻、170頁、第9巻、152、155-158頁。]

敗北した場合、戦争は何よりもまず政府体制全体の崩壊をもたらすだろう。」要するに、彼は「ロシアの自由を求める事業と、社会主義を目指すロシアの、そして全世界のプロレタリアートの闘争は、専制体制の軍事的敗北にきわめて強く依存している⁵²」ことを確信していたわけである。

レーニンの賛同者は、さらに先へ進んだ。社会民主党員 M・パヴロヴィチ (M・L・ヴェルトマン) は、1905 年に次のような空想にふけていた。「古いロシアの日本に対する政策は、極端に攻撃的な性格を持っている。日本人の視点からすれば、その政策の究極的な目的全体は朝鮮併合のみではない。朝鮮領有はそれ一つだけで「日出ずる国」の独立に対する絶えざる脅威、日本人民の上に垂れ下がるダモクレスの剣となる。そしてロシアは、好機が訪れればただちに日本の領土を攻撃し、日本を解体するだろう⁵³。」しかし実際には、日本の解体がペテルブルクの計画に含まれたことは一度もなく⁵⁴、ロシア政府内には韓国併合構想に対する賛同者だけでなく、徹底した反対者もいた。レーニンが予言したツァーリズムの軍事的敗北の結果によるロシア「政府体制」の崩壊も起こらなかった。この敗北から得られる「社会主義を目指す全世界のプロレタリアートの闘争」としての利益も、まったく眉唾物であることが明らかになった。さらに、レーニンは日本国民の政治的自由の度合を過大評価し、この国の社会・政治生活の実情についてまったく誤解していた。ソ連の日本学者は、当然のことながら「世界プロレタリアートの指導者」の言説に公然と異議を唱えることはできなかった。だが、その彼らでさえ、20 世紀初頭において日本人は「政治的無権利状態」にあり、国内では「巨大な軍・警察機関」が支配し、「超反動的警察体制」が存続していたと書いている⁵⁵。

⁵² 同上、157 頁。

⁵³ *Павлович М. (Вельтман М.). Русско-японская война. (Причины, ход и последствия). Женева, 1905. С. 62-63. [M・パヴロヴィチ (M・ヴェルトマン)『日露戦争(原因、経過及び影響)』(ジュネーブ、1905 年) 62-63 頁。]*

⁵⁴ Так, военный министр А.Н. Куропаткин, который на завершающей стадии будущей и, конечно, победоносной дальневосточной кампании планировал высадку десанта в Японии и захват ее столицы, одновременно в своих совершенно секретных записках императору подчеркивал, что задача России должна состоять в охране уже достигнутых «пределов без дальнейшего расширения таковых». – См.: *Субботин Ю.Ф. А.Н. Куропаткин и дальневосточный конфликт. «Дела на Дальнем Востоке могут привести нас к конфликту с Японией» // Россия: международное положение и военный потенциал в середине XIX – начале XX в. Очерки / Отв. ред. И.С. Рыбаченок. М., 2003. С. 132-133. [たとえば、陸軍大臣 A・N・クロパトキンは、将来における極東作戦に勝利した場合、その最終段階で日本に上陸部隊を上陸させ日本の首都を占領することを計画していたが、同時に、皇帝宛のその極秘書簡において、ロシアの課題はすでに得た「国境をさらに拡大することなく」、それを防御することであると強調している。Iu・F・スポテン「A・N・クロパトキンと極東紛争 <極東の事態は我々を日本との紛争に導く可能性がある>」I・S・ルイパチエノク責任編集『ロシア - 19 世紀中葉 - 20 世紀初頭の国際情勢と軍事力 概論 -』(モスクワ、2003 年) 132-133 頁を参照。]*

⁵⁵ См.: *Эйдус Х.Т. Влияние русской революции 1905-1907 гг. на рабочее и демократическое движение в Японии // Первая русская революция и международное революционное движение. / Под ред. А.М. Панкратовой. Ч. II. М., 1956. С.495-496. Современные японские авторы также подчеркивают, что в результате военной победы над Россией в их стране «окончательно утвердилась императорская система и японский империализм» (См.: Вада Х. Солидарность японских и русских социалистов во время*

同時代の人々から「親日的」と呼ばれていたボリシェヴィキ評論家たちの言説は、ロシアあるいは日本の現実に関する知識による裏づけを持たなかった。しかし、その本質においては当時のイギリスの言論界あるいは排露的な言論界一般の単なる二番煎じにすぎなかった。実際、当時のヨーロッパ社会主義運動の基本的公理の一つ、第二インターナショナルの規定では、日露戦争は「双方の側からの侵略的軍事紛争」と呼ばれていた。ところが、この紛争の開始について、ロシアと日本は等しく責任を負っているという考え方を、当時の人々は疑問視していた。

総じて言えば、ボリシェヴィキイデオログたちの思想的・理論的遺産は日露戦争の客観的研究のための土台とはなりえなかった。その原因は、この遺産がソ連国内で不適切な、しかもドグマ的に利用されたからだけではない。この戦争に関して、ボリシェヴィキ指導者たちがあまり発言しなかった、あるいはまったく何も言わなかったことによって、研究の進展は可能となった。その後、研究者たちは、日露戦争を分析する際、ますます儀礼的・形式的な形でのみ、レーニン主義への忠誠を示すようになった。ソ連期の歴史記述は、良い傾向ではあるが、レーニンの思想的遺産から離反する方向に進化していった。軍事的視点に立てば、戦争中、軍令面でロシア軍は数々の失敗を犯している。とはいえ、軍が満州における敗北を運命づけられていたなどという結論を導き出すソ連の軍事専門家は、まったく存在しなかった。

十月革命後の最初の何十年間か、ソ連の歴史記述は日露戦争の性格規定に際しては史学界の指導者 M・N・ボクロフスキーに追随した。ボクロフスキーは 20 世紀初頭のロシアに帝国主義の兆候を認めず、戦争自体についてもその帝国主義的性格を否定した。彼の最も有名な著作、一般向けの『最も簡潔に叙述されたロシア史』は「他ならぬ」レーニンの好意的評価を受け、1920～1934 年の期間に 10 版以上の版を重ねた。しかし、ボクロフスキーの死後間もなく、他ならぬ彼の弟子や賛同者はその評価を否定し、反マルクス主義的、反レーニン主義的な歪曲であり通俗化だと非難した⁵⁶。彼がロシア帝国主義を否定したことを指し、1917 年の十月革命の客観的前提に関する命題を否定する企てとみなしたのである。より個別的な事柄に関するボクロフスキーの言明によっても、それに劣らぬ憤激が引き起こされた。たとえば、ロシア太平洋艦隊は、旅順港の港外投

русско-японской войны // *Japanese Slavic and East European Studies*. 1981. Vol. 2. P. 7). [Kh・T・エイドゥス「日本の労働運動及び民主主義運動に対する 1905～1907 年ロシア革命の影響」A・M・バンクラトワ監修『第一次ロシア革命と国際革命運動』第 2 部（モスクワ、1956 年）495-496 頁を参照。現代の日本の著者たちもロシアに対する軍事的勝利の結果、日本では「天皇制と日本帝国主義が最終的に確立した」と強調している（和田春樹「日露戦争期における日露社会主義者の連帯」*Japanese Slavic and East European Studies*, Vol. 2 (1981), p. 7 を参照。]

⁵⁶ См.: Ярославский Е.М. Антимарксистские извращения и вульгаризаторство «школы» Покровского. Киров, 1939. [Ie・M・ヤロスラフスキー『ボクロフスキー「学派」の反マルクス主義的歪曲と通俗化』（キエフ、1939 年）を参照。]

錨地に、艦船を停泊させており、それが日本海軍の奇襲攻撃を受ける原因となった。ポクロフスキーは、この件に関して、「当時の国際法では、正式の宣戦布告はまったく必要とされていなかった。その状況においては、日本の攻撃は許容される⁵⁷」と主張している。この件について、1930年代末のある注釈者は、次のように書いている。「ポクロフスキーのこのような言明は、日本帝国主義を利し、日本帝国主義による同様の作戦の準備と遂行を容易にするものである⁵⁸。」これ以来、ソ連では日露戦争を双方からの略奪的で不正な戦争と規定するようになった。それだけでなく、「中国と朝鮮の略奪と隷属化を目的として」ロシアと日本によって行われた無条件に帝国主義的な戦争である、と特徴づける見方が優勢を占めるようになった。初期のポリシェヴィキ的な「親日的」な精神に従い、極東におけるロシアの侵略性を日本の「軍事的・封建的帝国主義」の防衛的政策、また、ロシアのそれ以上の中国への浸透を停止させようとする日本の志向と対比しようとしてきた者は厳しい非難の的にされた。たとえば、すでに言及した海軍史研究者 P・D・ブイコフも、その範疇に含まれる。

1940年代から1970年代までの時期は、ソ連の歴史記述において国際的テーマが盛んに論じられた時代であった。その中でとくに論じられたのは、極東で日本と争っていた時期におけるロシアと世界の列強との相互関係の問題であった⁵⁹。この方面で最も輝かしい著作となったのは、その研究に4分の1世紀以上を捧げ、この問題に関する傑出した成果を生み出した B・A・ロマノフの労作である。彼のモノグラフ「満州におけるロシア - 帝国主義時代における専制政治の対外政策史概論 (1892~1906年) -」は、すでに1928年に発表されている⁶⁰。ロマノフは、その新たな手堅い著作におよそ700頁を費やし、1890年代半ばから1907年までの日露外交関係におけるあらゆる変化を書き出した。すなわち、中国における勢力圏をめぐる列強の闘争、日英米ブロックの創出、

⁵⁷ Покровский М.Н. Русская история в самом сжатом очерке. М., 1930. С. 300. [М・N・ポクロフスキー『最も簡潔に叙述されたロシア史』(モスクワ、1930年)300頁。]

⁵⁸ ルチニン『1904~1905年の日露戦争』10頁、序文。

⁵⁹ См.: Деборин Г. Международные отношения в период русско-японской войны и первой русской революции. 1904-1907 гг. М., 1941; Гальперин А.Л. Англо-японский союз. М., 1947; Добров А. Дальневосточная политика США в период русско-японской войны. М., 1952; Международные отношения на Дальнем Востоке (1840-1949 гг.) / Под общ. ред. Е.М. Жукова. М., 1956; Розенталь Э.М. Русско-французские дипломатические отношения в период русско-японской войны и гулльский инцидент // Учен. зап. МГПИ им. В.И. Ленина. 1957. Т. СII; Кутаков Л.Н. Портсмутский мирный договор: (Из истории отношений Японии с Россией и СССР. 1905-1945 гг.). М., 1961; Международные отношения на Дальнем Востоке. Кн. 1-2. М., 1973 и др. [G・デボーリン『日露戦争及び第一次ロシア革命期における国際関係 - 1904~1907年 -』(モスクワ、1941年)、A・L・ガリペリン『日英同盟』(モスクワ、1947年)、A・ドブロフ『日露戦争期におけるアメリカの極東政策』(モスクワ、1952年)、Ie・M・ジューコフ総監修『極東における国際関係 (1840~1949年)』(モスクワ、1956年)、E・M・ローゼンターリ『日露戦争期における露仏外交関係とハル事件』、『V・I・レーニン記念モスクワ国立教育大学紀要』第102巻(1957年)、L・N・クタコフ『ポーツマス講和条約(日露・日ソ関係史から - 1905~1945年 -)』(モスクワ、1961年)、『極東における国際関係』第1・2冊(モスクワ、1973年)ほかを参照。]

⁶⁰ Романов Б.А. Очерки дипломатической истории русско-японской войны. 1895-1907 гг. 2-е изд. М., 1955. [B・A・ロマノフ『日露関係外交史概論 - 1895~1907年 -』第2版(モスクワ、1955年)]

日露紛争直前の時期、戦争自体の遂行期及びポーツマス講和会議の過程におけるロシアと日本の外交行動を詳細に考察している。著者によって収集され体系化された史料の分量に関しては、今日にいたるまでロマノフの研究に匹敵する研究は生まれていない。しかし同書において、この老熟した研究者は、自らの主要課題を、一点に限定した。すなわち、すでに 20 年も前に『全連邦共産党（ポリシェヴィキ党）史小教程』で定式化された公理に、具体的・歴史的内容を盛り込もうと、目指したのである。その公理とは、第一に、ツァーリ政府をこの戦争に突き進ませたのは大ブルジョアジーと「反動的地主層」であるという命題である。もちろん、これら支配階級は、一般的にも個別的にも「ベゾブラゾフ一派」によって代表されている。第二に、極東地域における「日本帝国主義の政策が、計画的・侵略的性格を持っていた」のかどうかを、解明することである⁶¹。それから間もなくして発表された共著『極東における国際関係』の著者たちは、ロマノフを模倣した。「ツァーリズムの冒険主義的政策はただ単に日本による侵略戦争の開始を容易にしたのみであった⁶²」と述べられている。この戦争での敗北の結果、ロシアは最終的にヨーロッパの憲兵であることをやめた。また、帝国主義列強の「前線の平坦化」が生じ、列強は間もなくほぼ力の均衡した二つのブロック、三国協商と三国同盟を生み出した、とソ連の歴史家たちは指摘している。

これらの国際関係研究者たちの研究は、概念的枠組みの面で、同じソ連の先行者たちの著作と異なっている。ロシアと世界のプロレタリアートの階級的任務だけでなく、極東も例外ではなく、国際舞台におけるロシアの国家利益の存在も認めていることである。ただし、専制体制がこの全国家的利益を正しく理解し擁護する能力を持っていなかったという認識、また、自国の防衛という領域で専制体制が、中身の腐敗した存在であったという認識については、両者は一致していた。

我々が関心を持っているテーマに関するソ連時代の便覧あるいは参考文献目録的な出版物はあまり多くない。最良の出版物の一つは、P・A・ザイオンチコフスキーの監修の下にロシア最大の五つの図書館の職員によって編纂され、1976～1986 年に出版された『日記と回想録に見る革命前ロシア史』（単行書・雑誌記事の注釈付き参考文献目録）⁶³である。この大部の出版物の第 4 巻第 1 部には 1904 年から 1976 年までの間にロシア語で出版された日露戦争に関する日記と回想記 400 点以上に関する情報が載せられている。ただし、この目録には、1917 年以降に出版された亡命者の出版物は含まれていない。

⁶¹ 同上、4 頁。

⁶² ジューコフ総監修『極東における国際関係』197 頁。

⁶³ V・I・レーニン記念ソ連国立図書館ほか『日記と回想録に見る革命前ロシア史』全 4 巻。

第3期 (1991 ~ 2004 年)

今日まで続いている第3期においては、ロシアの歴史記述は、1990年代初頭の共産主義体制とソビエト連邦の崩壊の後に形成され始めた、新たなタイプの文化の枠組みの中で発展している。「鉄のカーテン」と単一思想による独占が消滅し、膨大なアルヒーフや以前出版された書籍の秘密扱いが解除され、外国から新たな歴史情報が流入した。これら全体の組み合わせの結果として、ロシアの歴史記述は十月革命前の時代と同様に、再び世界と同じ土俵の上に立つことになった。現在のロシアの読者は、長い間、図書館の「特別書庫」に隠されていたロシア人亡命者の著作だけでなく、現在の外国の日露戦争研究者の研究⁶⁴もすべて閲覧することができる。一方、ロシアの指導的な専門家も、外国の研究者グループによる総括的出版物への参加を求められている⁶⁵。

ジャンルとテーマの多様性が、ロシアにおける歴史記述発展の現段階における最も顕著な特徴の一つをなしている。1980年代末から1990年代初めにかけて「ポートレートの中の歴史」というジャンルが復活し、人気を博した。このジャンルでは、歴史的事件や国家生活・社会生活の過程が、ロシアの最高レベルの文民官僚と軍人官僚の代表的人物の視点と活動、というプリズムを介して追究されている。ニコライ2世⁶⁶、大臣S・Iu・ヴィッテ⁶⁷、陸軍大将A・N・クロパトキン⁶⁸及びR・I・コンドラチェンコ⁶⁹、海軍大将

⁶⁴ См., напр.: *Пак Чон Хё. Русско-японская война 1904-1905 гг. и Корея. М., 1997.* [たとえば次の文献を参照。バク・チョン・ヒョ 『1904～1905年の日露戦争と朝鮮』(モスクワ、1997年)]

⁶⁵ Hugh Ragsdale, ed., *Imperial Russian Foreign Policy* (Woodrow Wilson Center Series) (Cambridge University Press, 1993. (19世紀末～20世紀初頭の対外政策に関する章はA・V・イグナチエフが執筆。)

⁶⁶ *Ферро М. Николай II. Пер. с фр. М., 1991; Рыбаченок И.С. Николай Романов и Ко. Путь к катастрофе // Российская дипломатия в портретах / Под ред. А.В. Игнатъева, И.С. Рыбаченок, Г.А. Санина. М., 1992. С. 299-318; Кряжев Ю.Н. Военно-политическая деятельность царя Николая II в период 1904-1914 гг. Курган, 2000; Боханов А.Н. Император Николай II. М., 1998 и др. [М・フェルロ 『ニコライ2世』フランス語からの翻訳(モスクワ、1991年) I・S・ルイバチェノク「ニコライ・ロマノフとその仲間たち - 破局への道 - 」A・V・イグナチエフ、I・S・ルイバチェノク、G・A・サーニン監修『ポートレートの中のロシア外交』(モスクワ、1992年) 299-318頁、Iu・N・クリャジェフ 『1904～1914年における皇帝ニコライ2世の軍事政策活動』(クルガン、2000年) A・N・ボハノフ 『皇帝ニコライ2世』(モスクワ、1998年) ほか。]*

⁶⁷ *Игнатъев А.В. С.Ю. Витте – дипломат. М., 1989; Игнатъев А.В., Субботин Ю.Ф. Под гром пушен. С.Ю. Витте и договоры 1904 и 1905 гг. с Германией и Японией // Российская дипломатия в портретах / Под ред. А.В. Игнатъева, И.С. Рыбаченок, Г.А. Санина. М., 1992. С. 319-336; Корелин А.П., Степанов С.А. С.Ю. Витте – финансист, политик, дипломат. М., 1998; Ананьич Б.В., Ганелин Р.Ш. Сергей Юльевич Витте и его время. СПб., 1999 и др. [A・V・イグナチエフ 『外交官S・Iu・ヴィッテ』(モスクワ、1989年) A・V・イグナチエフ、Iu・F・スポチン「砲音を聞きながら - S・Iu・ヴィッテと1904年及び1905年の対独・対日条約 - 」イグナチエフ、ルイバチェノク、サーニン監修『ポートレートの中のロシア外交』319-336頁、A・P・コレリン、S・A・ステパノフ 『S・Iu・ヴィッテ - 財政家、政治家、外交官 - 』(モスクワ、1998年) B・V・アナニッチ、R・Sh・ガネーリン 『セルゲイ・ユリエヴィチ・ヴィッテとその時代』(サンクトペテルブルク、1999年) ほか。]*

⁶⁸ *Субботин Ю.Ф. А.Н. Куропаткин и дальневосточный конфликт; Зуев В.Н. Генерал Куропаткин // Россия и АТР. Владивосток, 1998. № 2. [Спочин「A・N・クロパトキンと極東紛争」、V・N・ズエフ「陸軍大将クロパトキン」、『ロシアとアジア太平洋地域』(ウラジオストク、1998年) No. 2。]*

⁶⁹ *Куличкин С.П. Кондратенко. М., 1989. [S・P・クリチキン 『コンドラチェンコ』(モスクワ、1989年)]*

S・O・マカロフ及び Z・P・ロジェストヴェンスキー⁷⁰に関する書籍がそれである。日露戦争参加者の回想記や日記⁷¹、長い間「発禁」のカテゴリーに分類されていた歴史著作物や評論⁷²、新たに発見された文書史料が、省略なしに出版、あるいは再版されている。これらの出版物には日露紛争の様々な側面やエピソードが描き出されている⁷³。外務省⁷⁴、海軍参謀本部⁷⁵、内務省警察局⁷⁶、軍及び対外謀報・防諜機関⁷⁷、軍外交部⁷⁸、

⁷⁰ Познахирев В.П. Вице-адмирал З.П. Рождественский // *Вопросы истории*. 1993. № 10; Грибовский В.Ю., Познахирев В.П. Вице-адмирал З.П. Рождественский. СПб., 1999; Семанов С.Н. Тайна гибели адмирала Макарова. М., 2000; Последние адмиралы [С.О. Макаров, З.П. Рождественский]. М., 2002. [V・P・ボズナヒレフ「海軍中将 Z・P・ロジェストヴェンスキー」『歴史学の諸問題』No. 10 (1993 年) V・Iu・グリボフスキー、V・P・ボズナヒレフ「海軍中将 Z・P・ロジェストヴェンスキー」(Санクトペテルブルク、1999 年) S・N・セマノフ『マカロフ海軍大将の戦死の秘密』(モスクワ、2000 年)『最後の海軍大将たち (S・O・マカロフ、Z・P・ロジェストヴェンスキー)』(モスクワ、2002 年)]

⁷¹ Дневники императора Николая II / Под ред. К.Ф. Шацилло. М., 1991; *Кокцов В.Н.* Из моего прошлого: Воспоминания 1903-1910 гг. М., 1992 (репринт парижского издания 1933 г.); С эскадрой адмирала Рождественского. Сб. статей / Под ред. И.Л. Бунича СПб., 1994 (Русское военно-морское зарубежье. Вып. 4); *Семанов В.И.* Расплата. СПб, 1994; *Граф Г.К.* Моряки. СПб., 1997 (репринт парижского издания 1930 г.); Вел. кн. *Александр Михайлович*. Воспоминания в 2-х книгах. М., 1999; *Редигер А.Ф.* История моей жизни. Воспоминания военного министра. В 2-х тт. / Под ред. И.О. Гаркуши и В.А. Золотарева. М., 1999; *Гурко В.И.* Черты и силуэты прошлого: правительство и общественность в царствование Николая II в изображении современника. М., 2000; *Куропаткин А.Н.* Русско-японская война 1904-1905 гг. Итоги войны. СПб., 2002; *Лилъе М.И.* Дневник осады Порт-Артура. М., 2002 и др. [K・F・シャツィルロ監修『皇帝ニコライ 2 世の日記』(モスクワ、1991 年) V・N・ココフツォフ『我が過去より - 回想記 1903 ~ 1910 年 - 』(モスクワ、1992 年)(パリ版 [1933 年] のリプリント) I・L・ブニチ監修『ロジェストヴェンスキー海軍大将の派遣艦隊と共に』(論文集) 第 4 巻「ロシア海軍の外国」(Санクトペテルブルク、1994 年) V・I・セミョーノフ『清算 [= 復讐]』(Санクトペテルブルク、1994 年) G・K・グラフ『水兵』(Санクトペテルブルク、1997 年)(パリ版 [1930 年] のリプリント)『アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公回想記』全 2 巻(モスクワ、1999 年) レジゲル『我が人生の歴史』、V・I・グルコ『過去の相貌とシルエット - 同時代人が描いたニコライ 2 世治下の政府と社会 - 』(モスクワ、2000 年) A・N・クパトキン『1904 ~ 1905 年の日露戦争 - 戦争の結果 - 』(Санクトペテルブルク、2002 年) M・I・リリエ『旅順港包囲戦日記』(モスクワ、2002 年) ほか。]

⁷² *Ольденбург С.С.* Царствование императора Николая II. М., 1992 (репринт белградского издания 1939 г.); *Керсновский А.А.* История русской армии. В 4-х тт. Т. 3. 1881-1915 гг. М., 1994; *Левицкий Н.А., Быков П.Д.* Русско-японская война 1904-1905 гг. М., 2003; *Звонарев К.К.* Агентурная разведка. Кн. 1. М., 2003 (репринт московского издания 1929 г.) и др. [S・S・オリデンブルク『皇帝ニコライ 2 世の治世』(モスクワ、1992 年)(ベオグラード版 [1939 年] のリプリント) A・A・ケルスノフスキー『ロシア軍史』第 3 巻(1881 ~ 1915 年)(全 4 巻)(モスクワ、1994 年) N・A・レヴィツキー、P・D・ブイコフ『1904 ~ 1905 年の日露戦争』(モスクワ、2003 年) K・K・ズヴォナレフ『諜報機関』第 1 巻(モスクワ、2003 年)(モスクワ版 [1929 年] のリプリント) ほか。]

⁷³ Тайная война против России. Из документов русской контрразведки 1904-1905 гг. / Публ. Д.Б. Павлова // *Исторический архив*. 1994. № 3; Из предыстории русско-японской войны. Донесения морского агента в Японии А.И. Русина (1902-1904 гг.) / Ввод. статья, подготовка текста и комментарии В.А. Петрова // *Русское прошлое*. Историко-документальный альманах. Кн. 6. СПб., 1996; Варяг: Столетие подвига, 1904-2004 / Ред.-сост. В.И. Катаев и В.В. Лобыцын. М., 2004; Из истории русско-японской войны 1904-1905 гг. Порт-Артур. М., 2004 и др. [D・B・パヴロフ「対露秘密戦争 - 1904 ~ 1905 年のロシア防諜文書から - 」『歴史アルヒーブ』No. 3 (1994 年) 「日露戦争前史 - 在日海軍情報員 A・I・ルシンの報告 (1902 ~ 1904 年) - 」V・A・ベトロフ序論・本文校訂・注釈『ロシアの過去』(歴史文書アルマナック) 第 6 巻(Санクトペテルブルク、1996 年) V・I・カタエフ、V・V・ロブイツィン監修・編集『ヴァリヤグ - 勲功の一世紀 1904 ~ 2004 年 - 』(モスクワ、2004 年) 『1904 ~ 1905 年の日露戦争の歴史から - 旅順港 - 』(モスクワ、2004 年) ほか。]

⁷⁴ Очерки истории Министерства иностранных дел России. 1802-2002 / Под ред. И.С. Иванова. В 3-х кн. Т. 1. 860-1917 гг. М., 2002. [I・S・Иванов監修『ロシア外務省史概論 - 1802 ~ 2002 年 - 』第 1 巻(860 ~ 1917 年)(全 3 巻)(モスクワ、2002 年)]

⁷⁵ Главный штаб ВМФ. История и современность, 1696-1997 / Под общ. ред. В.И. Куроедова. М., 1998.

軍測地部⁷⁹、軍医務部⁸⁰、露清銀行⁸¹など、戦時期に活発に活動した省庁、機関及び部局の歴史に関する研究が 1917 年以前よりもはるかに広範囲な形で復活した。新たな動きとして、何らかの形で日露戦争史に係る統計⁸²、テーマ別の文書館便覧や古文書学的研究⁸³が現れ始めた。

ジャンルの多様性に加え、テーマも多様となっている。伝統的テーマではあるが、ま

[V・I・クロエドフ総監修 『海軍参謀本部 - 歴史と現代 1696 ~ 1997 年 - 』(モスクワ、1998 年)]

⁷⁶ Переудова З.И. Политический сыск России (1880-1917). М., 2000. [Z・I・ペレグドヴァ 『ロシアの政治的捜査 (1880 ~ 1917 年)』(モスクワ、2000 年)]

⁷⁷ Алексеев М. Военная разведка России. От Рюрика до Николая II. Т. 1. М., 1998; Очерки истории российской внешней разведки. В 6 томах / Под ред. Е.М. Примакова. Т. 1. М., 1996; Павлов Д.Б. Российская контрразведка в годы русско-японской войны // *Отечественная история*. 1996. № 1; Буяков А.М. Становление и развитие русской контрразведки на Дальнем Востоке в начале XX века // *Известия Российского государственного исторического архива Дальнего Востока*. Т. 3. Владивосток, 1998; Колпакиди А., Прохоров Д. Империя ГРУ. Очерки истории русской военной разведки. Кн. 1. М., 2000; Лубянка, 2. Из истории отечественной контрразведки / Рук. авт. колл. Я.Ф. Погоний. М., 2001 и др. [М・アレクセエフ 『ロシアの軍事諜報機関 - リューリクからニコライ 2 世まで - 』第 1 巻(モスクワ、1998 年)]e・M・プリマコフ監修 『ロシア対外諜報機関史概論』第 1 巻(全 6 巻)(モスクワ、1996 年)、D・B・バヴロフ 「日露戦争期のロシア防諜機関」『祖国の歴史』No. 1 (1996 年) A・M・ブヤコフ 「20 世紀初頭の極東におけるロシア防諜機関の形成と発展」『極東ロシア国立歴史文書館通報』第 3 巻(ウラジオストク、1998 年) A・コルラキジ、D・プロホロフ 『諜報総局の帝国 - ロシア軍事諜報機関史概論 - 』第 1 巻(モスクワ、2000 年)]a・F・ポゴニーほか 『ルビャンカ 2 - 我が国防諜機関の歴史から - 』(モスクワ、2001 年)ほか。]

⁷⁸ Сергеев Е.Ю., Улунян Ар.А. Военные агенты Российской империи в Европе. 1900-1914 гг. М., 1999 (2-е изд. - М., 2003); Подалко П.Э. Из истории российской военно-дипломатической службы в Японии (1906-1913 гг.) // *Япония*. Ежегодник. 2001-2002. М., 2002 и др. []e・Iu・セルゲエフ、Ar・A・ウルニャン 『ロシア帝国の在欧軍事諜報員 - 1900 ~ 1914 年 - 』(初版、モスクワ、1999 年。第 2 版、モスクワ、2003 年) P・E・ポダルコ 「在日ロシア軍外交部の歴史から (1906 ~ 1913 年)」『日本』年報 (2001 ~ 2002 年)(モスクワ、2002 年)ほか。]

⁷⁹ Глушков В.В., Шаравин А.А. На карте Генерального штаба - Маньчжурия. М., 2000 [V・V・グルシコフ、A・A・シャラヴィン 『参謀本部の地図の上で - 満州 - 』(モスクワ、2000 年)]

⁸⁰ Будко А.А., Селиванов Е.Ф. Военная медицина России в войне с Японией в 1904-1905 гг. // *Военно-исторический журнал*. 2004. № 6. С. 57-62. [A・A・ブトコ、]e・F・セリヴァノフ 「1904 ~ 1905 年の対日戦におけるロシアの軍事医学」『軍事史雑誌』No. 6 (2004 年) 57-62 頁。]

⁸¹ Мясников В.С. Русско-китайский банк и его роль в истории международных отношений в Восточной Азии // Востоковедение и мировая культура. Сб. статей к 80-летию академика С.Л. Тихвинского. М., 1998; Лукоянов И.В. Русско-китайский банк (1895-1904) // *Нестор*. ежеквартальный журнал истории и культуры России и Восточной Европы. 2000. № 2. [V・S・ミヤスニコフ 「露清銀行と東アジア国際関係史におけるその役割」『東洋学と世界文化 - アカデミー会員 S・L・チフヴィンスキー 80 歳記念論集 - 』(モスクワ、1998 年)]I・V・ルコヤノフ 「露清銀行 (1895 ~ 1904 年)」『ネストル』(ロシア・東欧歴史・文化に関する季刊雑誌) No. 2 (2000 年)]

⁸² Россия и СССР в войнах XX века. Статистическое исследование / Под ред. Г.Ф. Кривошеева. М., 2001. [G・F・クリヴощееフ監修 『戦争の中の 20 世紀ロシアとソ連 - 統計的研究 - 』(モスクワ、2001 年)]

⁸³ Русско-японские дипломатические отношения (1850-1917 гг.). Каталог документов (по материалам Архива внешней политики Российской империи) / Сост. Ч. Инаба. Т. 1. Токио, 1997; Российский государственный архив социально-политической истории. Каталог документов о Японии. 1904-1954 гг. / Сост. Ч. Инаба, Д. Павлов. Токио, 2001; Инаба Ч., Павлов Д. Roshia ni okeru gunji gaiko shiryō no kokai jōkyō («Расшифрование военных и дипломатических документов в России», на яп. яз.) // *Kokusai mondai*. 1992. № 11(392). [稲葉千晴編 『ロシア外交史料館日本関連文書目録』第 1 巻(1850 ~ 1917 年)(ナウカ、1997 年)]稲葉千晴、D・バヴロフ編 『ロシア共産党文書館日本関連文書目録 1904 ~ 1954 年』(東京、2001 年)]稲葉千晴、D・バヴロフ 「ロシアにおける軍事外交資料の公開状況」(日本語)『国際問題』No. 11 (通巻 392 号) (1992 年)]

だ十分に研究されていない、きわめて多様な新しいテーマが詳細に研究されている。たとえば、戦争中のロシア艦隊全般、極東における個々の作戦及び行動目的⁸⁴、旅順港防衛⁸⁵、第二義的な舞台における戦闘行為⁸⁶、戦争におけるコサックの役割⁸⁷、ロシアの個々の軍艦の運命⁸⁸、19世紀末～20世紀初頭の極東及びザバイカル地方における日本の秘密機関の活動⁸⁹、さらに日本国内におけるロシア兵士の墓誌⁹⁰である。A・V・イグナチエフが率いるモスクワの歴史研究者グループは、19世紀末～20世紀初頭の極東におけるロシアの対外政策に関する研究をまとめあげた⁹¹。また、ペテルブルクのB・V・アナニッチ及びR・Sh・ガネーリンをはじめとする多数の研究者からなるグループは、極東政策の問題をめぐるロシア官僚最上層部の闘争に関する考察を進め、成果をあげている。

⁸⁴ Золотарев В.А., Козлов И.А. Русско-японская война 1904-1905 гг. Борьба на море. М., 1990; Куликов С.В. Владивостокский отряд миноносцев // *Россия и АТР*. Владивосток, 1996. № 3; Йолтуховский В.М. Борьба с минной опасностью в русско-японскую войну и ее уроки // *Военно-исторический журнал*. 2001. № 7; Несолёный С.В. Миноносный флот России в русско-японской войне 1904-1905 гг. Дисс. канд. ист. наук. Самара, 2003 и др. [V・A・ゾロタリョフ、I・A・コズロフ 『1904～1905年の日露戦争 - 海上における戦闘 - 』(モスクワ、1990年)、S・V・クリコフ 『ウラジオストク水雷艇部隊』、『ロシアとアジア太平洋地域』No. 3(ウラジオストク、1996年)、V・M・ヨルトゥホフスキー 『日露戦争時における水雷の危険性と闘い及びその教訓』、『軍事史雑誌』No. 7(2001年)、S・V・ネソレイイ 『1904～1905年の日露戦争におけるロシア水雷艦隊』歴史学準博士論文(サマラ、2003年)ほか。]

⁸⁵ Сметанин А.И. Оборона Порт-Артура. М., 1991; Дискант Ю.В., Гузанов В.Г. Порт-Артур. 1904 // *Япония сегодня*. 1999. № 12; Лысеев А.В. Русский Порт-Артур в 1904 г. история военной повседневности. Дисс. канд. ист. наук. СПб., 2002. [A・I・Сметанин 『旅順港防衛』(モスクワ、1991年)、Iu・V・ジスカント、V・G・グザノフ 『旅順港 1904年』、『今日の日本』No. 12(1999年)、A・V・ルイセフ 『1904年のロシア旅順港 - 軍隊の日常生活の歴史 - 』歴史学準博士論文(サンクトペテルブルク、2002年)]

⁸⁶ Самарин И.А. Боевые действия на Северном Сахалине во время русско-японской войны // *Краеведческий бюллетень*. Южно-Сахалинск, 1993. № 3; Фефилов П.Л. К вопросу об обороне Амура в годы русско-японской войны // *XX век и военные конфликты на Дальнем Востоке*. Хабаровск, 1995. [I・A・Самарин 『日露戦争時の北サハリンにおける戦闘行為』、『郷土誌ビューレイン』No. 3(ユジノサハリンスク、1993年)、P・L・フェフィロフ 『日露戦争期のアムール防衛の問題に寄せて』、『20世紀と極東における軍事紛争』(ハバロフスク、1995年)]

⁸⁷ Воскобойников Г.Л. Казачество в русско-японской войне (1904-1905 гг.). Ростов н/Дону, 1995. [G・L・ヴォスコбойникоフ 『日露戦争(1904～1905年)におけるコサック』(ロストフナドヌ、1995年)]

⁸⁸ Самарин И.А. Боевые действия подводной лодки «Кета» в Татарском проливе летом 1905 г. // *Краеведческий бюллетень*. Южно-Сахалинск, 1994. № 2; Латышев В.М. Порт-Артур – Сахалин: (Крейсер «Новик» в русско-японской войне 1904-1905 гг.). Южно-Сахалинск, 1994; Куликов С.В. Повреждения броненосца «Севастополь» в боях за Порт-Артур // 5-я Дальневосточная конференция молодых историков. Владивосток, 1998. С. 42-45. [I・A・Самарин 『1905年夏のタートル海峡における潜水艦ケタの戦闘行為』、『郷土誌ビューレイン』No. 2(ユジノサハリンスク、1994年)、V・M・ラトイシェフ 『旅順港 - サハリン(1904～1905年の日露戦争における巡洋艦「ノヴィク」) - 』(ユジノサハリンスク、1994年)、S・V・クリコフ 『旅順港争奪戦における装甲艦「セヴァストポリ」の破損』、『第5回若手歴史研究者極東会議』(ウラジオストク、1998年) 42-45頁。]

⁸⁹ Косых В.И., Кузнецов В.В. Японские общества на Дальнем Востоке и в Забайкалье в конце XIX – начале XX вв. // Там же. С. 45-50. [V・I・コスイフ、V・V・クズネツォフ 『19世紀末～20世紀初頭の極東及びザバイカル地方における日本の結社』同上、45-50頁。]

⁹⁰ Гузанов В.Г., Судзукава М. Могилы русских воинов в Японии, 1904-1905. Осака, 1995. [V・G・グザノフ、鈴木正久 『日本国内のロシア兵士の墓 - 1904～1905年 - 』(大阪、1995年)]

⁹¹ История внешней политики России. Конец XIX – начало XX века: (От русско-французского союза до Октябрьской революции) / Под ред. А.В. Игнатъева. М., 1997. [A・V・イグナチエフ監修 『ロシア対外政策史 - 19世紀末～20世紀初頭(露仏同盟から十月革命まで) - 』(モスクワ、1997年)]

ロシア人の認識における日本及び日本人のイメージについての研究は、まったく新しく、有望な分野となっている⁹²。残念ながら、日露戦争に関する歴史記述の問題は依然として研究者たちの視野の外に置かれており、本論文がその種の初めての試みとなっている。19世紀末～20世紀初頭の日露関係に関する日本側の歴史記述の現状を、ロシアの読者に紹介しようとした1986年の試み⁹³も、その後、進展を見せていない。

何よりも日露戦争のまだ十分研究されていない側面に対する関心の高まりが、現在のロシアの歴史記述の特徴となっている。その際、歴史記述にとって隠されたテーマや禁じられた名前はまったく存在しない。最近までその活動が日露戦争史の「空白地点」となっていたロシアと日本の秘密機関に対して、研究者の特別の関心が向けられている。近年、ロシア国内で出版されたこの紛争の歴史に関するモノグラフ、論文その他の出版物全体のうち3分の1以上が何らかの形でこれらの問題をテーマとしている。ロシアの歴史研究者は日本をはじめとする外国の研究者と並行して、また、彼らと協力しながらこれらのテーマの研究を進めており、これが現在の状況の特徴となっている。19世紀末～20世紀初頭に東アジア諸国に駐在していたロシアの陸軍武官及び海軍武官の活動に焦点が当てられている⁹⁴。日本の明石元二郎陸軍大佐及び彼の協力者となったロシアの社会活動家・革命家によるロシアと西欧諸国での活動に関連する一連の問題が、これまで知られていなかった文書館資料を援用して詳細に解明された⁹⁵。ロシアの軍諜報機関、

⁹² Япония накануне и во время войны с Россией глазами Святого Равноапостольного Николая Японского. Вып. 1. СПб., 1991; *Самойлов Н.А.* Ито Хиробуми: образ японского государственного деятеля в российском восприятии (начало XX в.) // Из истории религиозных, культурных и политических взаимоотношений России и Японии в XIX-XX вв. Сб. статей. СПб., 1998; *Дроздова Э.А.* Образ Японии и японцев в русско-японскую войну 1904-1905 гг. (по материалам дальневосточной периодики и архивным фондам Приамурского генерал-губернаторства // 5-я Дальневосточная конференция молодых историков. Владивосток, 1998. [『日本の大主教ニコライが見た対露戦前夜及び戦時中の日本』第1巻(サンクトペテルブルク、1991年) N・A・サモイロフ「伊藤博文 - ロシア人の認識における日本の政治家のイメージ(20世紀初頭) - 」『19世紀末～20世紀初頭におけるロシアと日本の宗教・文化・政治関係史から』(論文集)(サンクトペテルブルク、1998年) E・A・ドロズドワ「1904～1905年の日露戦争期における日本及び日本人のイメージ(極東の定期刊行物資料及びブリュム-リエ総督府文書による)」『第5回若手歴史研究者極東会議』(ウラジオストク、1998年)]

⁹³ *Моргул З.Ф.* Японская историография русско-японских отношений в 1898-1905 гг. // Японская историография отношений России с сопредельными странами на Дальнем Востоке. Сб. научных трудов / Под общ. ред. А.И. Крушанова. Владивосток, 1986. [Z・F・モルグン「1898～1905年の日露関係に関する日本の歴史記述」A・I・クルシャノフ総監修『ロシアと極東隣接諸国の関係に関する日本の歴史記述』(学術論文集)(ウラジオストク、1986年)]

⁹⁴ *Петров В.А.* Русские военно-морские агенты в Японии (1858-1917) // *Знакомьтесь – Япония*. 1998. № 19; *Добычина Е.В.* Русская агентурная разведка на Дальнем Востоке в 1895-1897 годах // *Отечественная история*. 2000. № 4. С. 161-170; *Она же*. О происках Токио в Корею на рубеже XIX-XX вв. исправно докладывал в Петербург Генерального штаба подполковник И.И. Стрельбицкий // *Военно-исторический журнал*. 2004. № 3. С. 43-47. [V・A・ペトロフ「ロシアの日本国内海軍諜報員(1858～1917年)」『日本紹介』No. 19(1998年) Ie・V・ドブイチナ「1895～1897年における極東のロシア諜報機関」『祖国の歴史』No. 4(2000年) 161-170頁、同「19世紀末～20世紀初頭における朝鮮での東京の陰謀について I・I・ストレリビツキー陸軍中佐はペテルブルグの参謀本部に正確に報告していた」『軍事史雑誌』No. 3(2004年) 43-47頁。]

⁹⁵ *Павлов Д.Б., Петров С.А.* Полковник Акаси и освободительное движение в России (1904-1905 гг.) //

その組織機構及び他の省庁の同様の部局との連携をテーマとする一連の研究⁹⁶も発表された。ロシアの防諜機関及び対外諜報機関の活動に関する研究は、戦時中にロシア本国、西欧諸国及び小アジア、アフリカ北部、中国及びインドシナに創設されたその個別の諜報網を実例として行われている⁹⁷。大規模な防諜作戦と諜報活動、たとえば、極東遠征時における第二太平洋派遣艦隊の警備、敵側秘密通信の傍受⁹⁸、日本とロシアの諜報機関の活動についての外国の専門家による見方⁹⁹が研究されている。戦時期における双方の思想宣伝戦の歴史に関する検討が開始されている¹⁰⁰。

我々が指摘したロシアの歴史記述の「再正常化」は肯定的側面とともに、ロシア文化全体におけるのと同様、支配的な基本理念を欠く矛盾した多元的構造へと、歴史科学を変質させている¹⁰¹。ソビエト科学のドグマが否定された結果の一つとして、科学的知識

История СССР. 1990. № 6. С. 50-71; *Pavlov D. Japanese Moneta...nd the Russla..n Revolution, 1904-1905 // Acta Slavica la..ponica* (Саппоро) 1993. Т. XI. Vol. II; *Павлов Д.Б., Петров С.А.* Японские деньги и русская революция // Тайны русско-японской войны. М., 1993 (в пер. на яп. яз. – Иокогама, 1994) и др. [D · B · Павлов, S · A · Петров 「明石陸軍大佐とロシアの解放運動 (1904 ~ 1905 年)」 『ソビエト連邦史』 No. 6 (1990 年) 50-71 頁, D. Pavlov, "Japanese Money and the Russian Revolution, 1904-1905," *Acta Slavica Japonica*, T. XI, Vol. II (Sapporo, 1993) D · B · Павлов, S · A · Петров 「日本の資金とロシア革命」 I · V · Делевьянко 編 『日露戦争の秘密』 和訳 (成文社, 1994 年) (原書, モスクワ, 1993 年) ほか。]

⁹⁶ Русская разведка и контрразведка в войне 1904-1905 гг. Документы / Сост. И.В. Деревянко // Тайны русско-японской войны. М., 1993; *Кравцев И.Н.* Спецслужбы России в русско-японской войне 1904-1905 гг. Дисс. канд. ист. наук. М., 1996; *Макаров И.С.* О процессе формирования организационной структуры военной разведки Российской империи (последняя треть XIX – начало XX вв.) // Многоликая история. Сб. статей. М., 1997; *Колпакиди А.И.* К вопросу о взаимодействии российских спецслужб в дооктябрьской России // Политический сыск в России: история и современность. Сб. материалов международной научной конференции. СПб., 13-15 мая 1996 г. СПб., 1997; *Сергеев Е.Ю.* Военная разведка России в борьбе с Японией (1904-1905 гг.) // *Отечественная история*. 2004. № 3 и др. [「1904 ~ 1905 年の戦争におけるロシアの諜報機関と防諜機関 - 文書 - 」 Делевьянко 編 『日露戦争の秘密』, I · N · Крауфツев 「1904 ~ 1905 年の日露戦争におけるロシアの特務機関」 歴史学準博士論文 (モスクワ, 1996 年), I · S · Макаров 「ロシア帝国軍諜報機関の組織機構の形成過程について (19 世紀の最後の 3 分の 1 ~ 20 世紀初頭)」 『多面的な歴史』 (論文集) (モスクワ, 1997 年), A · I · Колпакки 「十月革命前ロシアにおけるロシア特務機関の連携に関する問題に寄せて」 『国際学術会議資料集 - サンクトペテルブルク・1996 年 5 月 13 ~ 15 日 - 』 (サンクトペテルブルク, 1997 年), Ie · Iu · Сергеев 「対日戦におけるロシアの軍諜報機関 (1904 ~ 1905 年)」 『祖国の歴史』 No. 3 (2004 年) ほか。]

⁹⁷ *Павлов Д.Б.* Русско-японская война 1904-1905 гг.: Секретные операции на суше и на море. М., 2004. [D · B · Павлов 『1904 ~ 1905 年の日露戦争 - 陸海における秘密作戦 - 』 (モスクワ, 2004 年) 』]

⁹⁸ *Инаба Ч.* Из истории разведки в годы русско-японской войны (1904-1905). Международная телеграфная связь и перехват корреспонденции противника // *Отечественная история*. 1994. № 4-5. [稲葉千晴 「日露戦争と国際通信 - 欧日間の電信の発達とロシアの日本電報傍受 - 」 『祖国の歴史』 No. 4-5 (1994 年) 』]

⁹⁹ Из истории разведывательной деятельности Японии и России. Доклад полковника британского Военного министерства Дж.Э.Л. Халдейна. 1909 г. / Публ. С. Добсон // *Исторический архив*. 1997. № 1. [S · Дрпсон 「日本とロシアの諜報活動の歴史から - 英国陸軍省陸軍大佐 J · E · L · ハルデーの報告 1909 年 - 」 『歴史文書館』 No. 1 (1997 年) 』]

¹⁰⁰ *Мацумура М.* Российская пропаганда во время русско-японской войны 1904-1905 гг. // *Россия и АТР*. Владивосток, 2002. № 4; см. также специальный раздел в книге Д.Б. Павлова «Русско-японская война 1904-1905 гг.: Секретные операции на суше и на море». [松村正義 「1904 ~ 1905 年の日露戦争期におけるロシアのプロパガンダ」 『ロシアとアジア太平洋地域』 No. 4 (ウラジオストク, 2002 年) 』, Павлов の単行本 『1904 ~ 1905 年の日露戦争』 のとくにこれに関する章も参照。]

¹⁰¹ *Аймермахер К.* Смена парадигмы в российской культуре. Переориентация между распадом и новым

の価値そのものが低下させられた。さらにその結果として、日露戦争史に関する出版物、とりわけ概説書の水準の低下が生じた¹⁰²。また、以前のような意見の一致に代わり、必ずしも十分に裏づけられていない意見や評価のばらまきが行われるようになった。思想的・理論的側面においては、日露戦争に関する現在のロシアの歴史記述は、主要な二つの潮流に分けられる。第一の潮流は「客観主義的」、第二の潮流は「ネオ・スラヴ主義的」と呼ぶことができる。両者の間の境界は必ずしも明確に区分されておらず、これらの潮流自体も構造化されたものではない。それぞれの代表者の多くも、自分の思想的所属を必ずしも完全に自覚しているわけではない。

すでにソ連時代に形成された学派である客観主義派の研究者たちは先行する時期における歴史記述の成果を発展させようと努めている。だが、そのドグマ中心主義、テーマの限定性、一般的評価に対する所与性・忠実性を捨てている。彼らは、日露戦争を双方からの帝国主義的侵略戦争と特徴づけている。だが、それと同時に、20世紀初頭にロシア国家が有していた極東における客観的な地政学的・社会経済的課題を、拡張主義的・植民地主義的な達成方法と区別してとらえようと試みている。この戦争におけるロシアの敗北は、もはや「腐朽しきった政治体制の恥ずべき降伏」とはみなされていない。ポーツマス講和は、日本だけでなくロシアに対しても「ある程度まで満足とを感じる」根拠を与えた。なぜならば、講和はロシアが「弱体化した西部国境を支え、揺らいでいたヨーロッパ及び近東の情勢に対する影響力を復活させる」ことを可能とした。そして、全体として「それほどまでには」ロシアの「大国としての地位」を損なわなかったからである。A・V・イグナチエフとIu・F・スポチンは考えている¹⁰³。これらの著者の意見によれば、軍事的敗北によるロシアの損失を「最小限に抑える」上で、ヴィッテの外交手腕が貢献した。

この潮流に属する歴史家の一般的な特徴は、主体的・個人的要因にアクセントを置いていることである。彼らは、ロシア内外の文書館から新たに発見された文書に基づき、皇帝及び帝政下の司令官たちから外務省と警察局の中級官吏にいたるまで、ロシア官僚

формированием (1987-1997) // Русская культура на пороге нового века / Под ред. Т. Мотидзуки. Саппоро, 2001. С. 18. [K・アイメルマヘル「ロシア文化におけるパラダイムの転換 - 崩壊と新たな形成の間における方向転換 (1987~1997年) - 」望月哲男編『現代ロシア文化』(国書刊行会、2000年)18頁。]

¹⁰² В качестве иллюстрации укажем на книгу англичанина К. Мартина «Русско-японская война 1904-1905», выпущенную в свет в 2003 г. московским издательством «Центрполиграф» в русском переводе. Известные российские флотоводцы адмиралы Н.И. Скрыдлов и О.А. Энквист наречены здесь «Скрыдловым» и «Анквистом», броненосцы вместо 12-дюймовых вооружены «12-пудовыми» орудиями и т.д. При этом издатель забывает сообщить не только имя переводчика, но и то, что впервые эта книга вышла в Лондоне в 1967 г. [その実例として、2003年にモスクワの出版社「ツェントロポリграф」によって出版されたイギリス人C・マーティンの『日露戦争 1904~1905年』の露訳本をあげたい。この本ではロシアの著名な艦隊司令官N・I・スクルイドロフ海軍大将とO・A・エンクヴィスト海軍大将の名前が誤って記されており、装甲艦は「12インチ」砲ではなく「12ブード」砲を装備していたなどの誤記がある。しかも出版者は訳者名だけでなく、この本が最初はロンドンで1967年に出版されたものであることも伝え忘れている。]

¹⁰³ イグナチエフ、スポチン「砲音を聞きながら」334-335頁。

制の各種レベルに属する人物たちの活動と個人的特性に注目した。そして、従来のようなあまりにも単純化された評価を根本的に修正し、あるいはこれに補足を加えている。たとえば、陸軍大臣クロバトキンは、これまで戦略決定に際しては優柔不断な戦争指導者であり、その地政学的見解はきわめて変わりやすく矛盾に満ちていた、と批判されてきた。しかし、今日では、豊富な戦闘経験を持ち、個人的にも勇敢な偉大な軍事理論家と評価されている¹⁰⁴。ソ連時代の著者たちの著作物、たとえば A・L・シードロフのものでは、ロジェストヴェンスキー海軍大將は、「傲慢かつ臆病者」とされていた。だが現在では、「多大のエネルギー、仕事能力、そして強固な意志」を備えた「優秀な海軍軍人、有能な組織者」であった、と再評価されている。ただし、「当時のロシア海軍の他の圧倒的多数の大將たち」と同様に、戦術的な素養が不足していた、と釘も刺されている¹⁰⁵。ロシア皇帝は、従来は打算的で無責任な冒険主義者である「ベソブラゾフ派」の言いなりになった、自主性のない人物として描かれていた。だが、その皇帝自身が、極東紛争において果たした役割についての理解も、変わりつつある。たとえばモスクワの女性研究者 I・S・ルイバチェノクの見方によれば、ロシア皇帝は「極東に向かって進出した」との、ある種の抑えがたい欲求を感じていたことになる。しかし、その際には「政策上の戦略的・戦術的目算というよりは、むしろ国家の福利に関する一般的理解、また、その局面における衝動的な気運」を指針としていたと指摘されている¹⁰⁶。

私は、すでに言及した著書『1904～1905年の日露戦争 - 陸海における秘密作戦 - 』において、新しい史実の発掘を試みた。すなわち、この戦争では、日本側の諜報機関のみが傑出した役割を果たしたという一般に知られている理解を覆し、ロシア特務機関も日本諜報機関と並び立つほどのレベルであったことを立証している。また私は、「ハル事件」をめぐる論争に立ち返り、事件に関する国際審査の結論の見直しを行い、1904年10月初旬の北海における出来事の実際の経過を再構成した。それと同時に、第二太平洋派遣艦隊の警護に関与したロシア防諜員について、従来よりもさらに慎重に吟味し、評価を与えている。同書では、歴史文献において初めて、1904～1905年当時の極東最大のロシア秘密機関であった前駐韓ロシア公使 A・I・バヴロフの上海諜報機関の活動に光が当てられた。

このように、新たな歴史的知見の蓄積と吸収を土台として、日露戦争史の再解釈が徐々に進んでいる。

ネオ・スラヴ主義的潮流の代表的論者たちは、往々にして自らを「愛国者」と認識している。この潮流の特徴は、十月革命前の公式歴史文献の立場から、ただし、その大國

¹⁰⁴ スポチン「A・N・クロバトキンと極東紛争」127-159頁。

¹⁰⁵ ソタリョフ、コズロフ『1904～1905年の日露戦争』157頁。

¹⁰⁶ ルイバチェノク「ニコライ・ロマノフとその仲間たち」304、309-310頁。

主義的自尊心という点では、それさえも上回る立場から、日露戦争に目を向けている点である。彼らは、我々の分類による第一の潮流の代表的論者との間の論証に基づいた議論を避け、論争するのではなく、主張するほうを好んでいる。たとえば、ロシア税関史研究者 I・Iu・キスロフスキーは、日露戦争前夜の極東における日本の領土的・経済的拡張を指摘している。彼の見解によれば、この拡張にはロシアの国家安全保障だけでなく、その主権と独立に対する深刻な脅威さえ潜んでいた。キスロフスキーは、他のロシア「愛国者」たちと共に、「独自の、特別の発展の道が宿命づけられている大国の復活¹⁰⁷」を夢見ている。

地政学研究者である V・V・グルシコフと A・A・シャラヴィンは、1904～1905 年の極東紛争の開始には、双方に等しい責任があったという原則に形式的には従いながらも、日本の侵略的意図をとりわけ強調している。彼らの意見によれば、日本の最終目的はまさに世界制覇の達成にあった。ロシア側の立場は次の言い方で特徴づけられている。「ロシアは他国の領土を要求することなく、中国の間では東清鉄道の敷設と運営を基礎として、……朝鮮との間では『露領林業組合』が取得した利権を基礎として、極東諸国との間で平和的互惠協力を達成しようとしていた¹⁰⁸。」実際、そのすぐ次のページでは、中国へのロシアの軍事力配備について述べられているにもかかわらず、この状況は次のように正当化されている。「ロシアは、満州において経済関係と軍事関係を確立することにより、自国極東の諸州と島々を守るいわば防御最前線としての役割を果たそうとしていた。それだけでなく、日本人が強奪しようと狙っていた中国や韓国など、ロシアの友好国家の庇護者としての役割をも、引き受けようとしていた¹⁰⁹。」「ロシア軍の満州への進駐がなかったとしても、ユーラシア大陸への日本の軍事侵略は遅かれ早かれ生じたに違いない」のであるから、戦争は「宿命であり不可避であった。」彼らの見解によれば、「永久には言わないまでも、長期間にわたって日本軍部の熱を冷ます」ことができる唯一の方策は、「極東へのロシア軍の強力な集結¹¹⁰」しかなかった。

そもそも、グルシコフとシャラヴィンの著書においては、この地域へのロシアの軍事力配備の必然性を示すことが最も重要な内容となっている。したがって、ベゾブラゾフ一派の活動は軍備増強論の支持者として、異例なほど高く大々的に評価されている。「彼らは全力を尽くして侵略的な『大日本国』計画の実現を阻止しようとした。」これは「ロシア一国の利益だけではなく、サムライの子孫たちによって「ブラックリスト」に書き

¹⁰⁷ Кисловский И.Ю. От политики «Drang nach Osten» к доктрине «открытых дверей»: (Экспансия против России на рубеже XIX-XX вв.). М., 2002. С. 3-4, 118, 247-249. [I・Iu・キスロフスキー 『東進政策』から「門戸開放」ドクトリンへ - 19 世紀末～20 世紀初頭における対露拡張 - 』（モスクワ、2002 年）3-4、118、247-249 頁。]

¹⁰⁸ グルシコフ、シャラヴィン「参謀本部の地図の上で」373 頁。

¹⁰⁹ 同上、374 頁。

¹¹⁰ 同上、45、374-375 頁。

込まれていた大小の多数の国々の利益にもかなっていた」というのだ。著者たちは、ロシアの戦争準備不足とその後における敗戦の責任を、ヴィッテやクロパトキンという、極東における武力威嚇に反対するロシア対外政策の指導者たちに帰している¹¹¹。

これらの著者たちの研究は、陸軍測地部隊将校たちの極東における活動をテーマとしている。この主要テーマに関する彼らの推論が示す論理的一貫性もまた、先に紹介した主張と同程度のもとなっている。筆者たちは、一方でロシア陸軍が1904～1905年秋冬期の作戦を「地図作成の準備のまったくできていない」地域で戦わざるをえなかった、という事実を認めている。にもかかわらず、全体的には「満州において軍事行動をとった際、地政学的調査及び地図作成の準備は、満足すべき程度まで進んでいた¹¹²」と判断している。

ここに見られるように、ネオ・スラヴ主義的潮流の研究に一般的に認められる傾向は、歴史事実の点だけでなく、単純な論理の点でも矛盾に満ちている点である。この潮流の代表的論者たちが彼らの先駆者である革命前ロシアの地政学者や評論家の著作に強い関心を持ち続けていることも、まさにこの偏向と結びついている。先に紹介した「黄禍」問題に関する20世紀初頭の専門家の著作の再出版が、この潮流の枠組みの中で行われているのは偶然ではない¹¹³。その思想的所与性および忠実性が災いし、日露戦争の研究における一潮流としての「愛国主義的」流れには長期的な展望はないとあえて予想しておきたい。

日露戦争100周年は、ロシアでは一般には注目されていないが、まったく無視されているわけでもない。今年春、政府に近い「ロシア21世紀委員会」は、この日付をテーマとする円卓会議を開催した。また、参謀本部軍事アカデミーではかなり幅広い代表者を集めた会議「一世紀のプリズムを通して見た戦争の経過、結果及び影響」が開催された。その作業には同アカデミー、軍事史研究所、ロシア科学アカデミー東洋学研究所の専門家や、主要専門定期行物『軍事史雑誌』及び雑誌『軍事思想』を担当する専門家が参加した。この会議では主にこの紛争の軍事的側面、また、その後における陸海戦争術に対する影響が検討された。正教会の代表者が会議に招待されたことは、時代の特徴を示す出来事となった。これはソ連時代には決してありえないことであった。大天使ミハイル聖堂司祭のアンドレイ神父が、戦争における正教会聖職者の役割をテーマとする小報告を行った。

¹¹¹ 同上、44-45、375頁。

¹¹² 同上、379頁。

¹¹³ См.: Болховитинов Л.М. Колонизация Дальнего Востока // Арабески истории. Вып. 34. М., 1996; Вандам А.Е. Геополитика и геостратегия. М., 2002. [L・M・ボルホヴィチノフ「極東の植民地化」『歴史のアラベスク』第3/4号(モスクワ、1996年) A・Ie・ヴァンダム『地政学と地政学的戦略』(モスクワ、2002年)を参照。]

テレビ・チャンネル「ロシア」は、2004年2月から半年間にわたって巡洋艦「ヴァリャーグ」の勲功をテーマとする連続ドキュメンタリー・フィルムを放映した。その前年の2003年夏、同テレビ会社は、アイルランド海に遠征隊を派遣した。そこはそれ以前にポリシェヴィキ政府によって金属屑用として売却されたこの巡洋艦が1920年に沈没し、その後、1925年に海底でイギリス人の手で爆破された場所である。巡洋艦の装甲甲板の残骸、艦装品の断片が撮影され、この中央テレビ放送で放映された。また、この番組の著作者兼監督のアレクセイ・デニソフは、巡洋艦が建造されたアメリカの造船所、巡洋艦がその沿岸付近で大破した韓国の海岸、フランス、そして日本を訪れた。済物浦（韓国の仁川）の投錨地から5マイルの地点で繰り広げられた1904年2月10日（露暦1月28日）の悲劇的事件は、100年前と同様、ロシアではそのヒロイズムの点でロシア海軍史上比類のない事件とみなされている。S・B・イワノフ国防大臣は、すでに紹介した文書集『ヴァリャーグ - 勲功の一世紀 1904~2004年 -』の序文において、ロシア国民は「過去に立脚し、ロシアの軍事力を維持し増強するため、偉大で比類のない我々の過去の遺産を記憶し、敬わなければならない」と強調している。